清洲雜物

七

大正十五年九月下院起草

特別
14
1919
385

176653

清閑雜抄

大正十五年十月起筆

○昨一日市中のそこらあるきして二三冊の古書を購ふ

一 東坡書數十二冊

東坡と謂はるる人を考ふる時の如きは一と推すべき數なり

彼の筆蹟を有するものは在世中

無之可らず

荷風蔵書

東京本牛込区市谷鷹匠町三番地 東京堂書店

Cover design for a magazine. Oil Painting by C. E. Chambers. (*The studio* から)

38- 9174

一 說當　二十冊

富山の地誌寛政年間の著述なり支那の名山志を範とし年号を以て山高山未だ架中にあらず婚礼の式を以て也、此書考証極めて精也

一 古陶錄　一冊

二世花六自筆とエロタイプ版に附したるもの須田雅堂の手にあり、図書極めて多し、文豪貴族の愛玩すべき名工の書画保存版

十二行

一 芸臣公故實　一冊

嘉永年間の不法なる也多分拙作なれども原本は貴重の書なり

版なれども大筆府の地理を詳悉し殆ど版を始めとす、模版と云ふ、拙作面白き木流に附したる所以なり、模版の原本も金沢架中にあり、

司馬江漢の見た駿府花街

薊廼舍主人

司馬江漢の長崎紀行（天明八年四月―翌年四月）に、三部の書があることは、前號（九月號）に、新村博士のお說明の通りである第一の西遊旅譚は、江漢が旅行から歸つて、滿一年、即ち寛政二年（庚戌）四月に、門人關江平民が、江漢先生著として刊行、全五冊、春波樓の藏版になつて居る。第二の畫圖西遊譚は、まだ見るの機會を得ないが、享和三年八月、鴨伊兵衞の板行であるといふ、さすれば西遊旅譚の、出版されてから十三年後になるわけだ。（佐村八郎氏の國書解題の記事は、チト信憑しがたし）一說によると西遊旅譚第一卷九丁ウラに、久能山之圖を、挿入したことが、其筋の忌諱に觸れたとかで、此の畫圖西遊譚には、取りのけてあるとのことだ、要するにお譴責を受けたので、久能山の見取圖を取り去り、改題して板行したものであらう、其常時にあつては、久能山の見取圖を、寶本に挿入するなどは、大それたことで、お叱責を蒙るのは、當然のことであつたのである。

久能のお山は、榊原越中守（旗本ではあるが大名の格式）が、與力同心を率ゐて、嚴に守護して居つたのである、云ひ傳へによると、その昔大名でさへ、參詣の場合は、一ノ門（御坂十七曲を登りて六丁目）まで來ると、大劍を取り上げられ、二ノ門では、小劍も取上げられたとのことだ、そして愛宕社（八丁目）から奥は、熨斗目以上の身分でないと、登れないことになつて居たとのことである、東照公の靈廟として、非常に、やかましいお山で、あつたのである。

久能山之圖を、除去した畫圖西遊譚を、再版と見るならば、前の西遊旅譚は、第一版と云ふことが出來る、次に第三の西遊日記は、自筆の寫本で六冊である、そして西遊旅譚の、別本とも云ひ得られる。この自筆寫本の西遊日記は、江漢の長崎旅行から歸つて、廿餘有年經つた、文化十二年（乙亥）に、彼れの手控から、綴り直して、淨書したものである、その奥書に「小子江漢、今隱遁して世用なし、廿八年以前遊歷したる時、日々記したるを以て爰に誌しぬ、文化乙亥（十二年）三月也、西遊日記と題號す」とある、ツマリ江漢の考では、是れを公にするといふのではなく、單に老後の思出に、一本を書き綴つて、殘したまでゝあらう、夫れ故に私交上のことなど、隨所にあらはれて居るのである、そして此の貴重なる旅行日記は、東京陸軍士官學校の所藏本である。

以上を西遊日記の解說として、次から駿府に於けるその一節、即ち新村博士の「駿府及庵原」の部に、特に殘された、府中の花街のぞきを、抄出することにしよう、名にしおふ駿府の色まち、二丁町は、江戸吉原への、引きのこり（移轉せざりし殘部）で、府中の西北部に、一郭を成して居る、由緒のあるくるわである、さて江漢が駿府に、到着したのは、五月十一日（天明八年）で、約一ヶ月、訪問やら、招待されるやらで、ブラ〳〵遊びつゝ、畫筆をとつたのである。

三日（六月）天氣、小判屋（元通町小判屋源右衛門）より畫の謝禮來、此日玄庵（兩替町六丁目長谷玄菴）と、二丁まちと云處、此地の色町なり參る、

往來のはづれ、左へ少し入る處、誠に二町あり、入口に茶屋あり、玄庵案内にて、何屋とか云ふ亭にのぼり、新造を二人よぶ、中位の美人なり、酒肴出てる、硯蓋（廣ぶたの小さきもの）にタヽミイワシとて、白すを干したる物に醬油付、燒たるをあしらへ、其餘の喰品、皆之に順（準）ずるなり、日も暮れければ、娼婦の云、チト、ソコラ

へ参イロミ云、初會にて手をひかれ、見世を見あるく、誠に奇妙也、二階のゑん(縁)に、ランカン(欄干)あり皆はき(履)物を爰に置なり、たゝみ(疊)きたなし、酒一向に不呑、故に酒肴は、別に申付取よせるなり、地まわりにて、サラシの手拭ひを、ほうかむりにして、ぞめく者あり、酒さへ呑ますれば、座しき(敷)へ參り、たねこを持つなり、亦爰に酒樂とて、其比通人あり、然るに江戸吉原ハ、爰より來ると云故にや、見世格子、吉原の趣きなり、然るに女郎の、見世に並び樣に違ひあり、格子の處横なり、のれん(暖簾)の内に入るに、横の處正面なり、うちかけ(裲襠)にて、並びたる見世付、吉原風なり、夜に入、雨風、爰に泊りてよく(翌)朝歸る

遊廓の記事を抄錄したついでに、野芝居の一節を、附け加へることにする、さて一日間をおいた、

五日、天氣、暑を催す、玄庵、宗與(小西源左エ門)兩三輩にて、寺町と云處、野芝居あり見物す、江戸より尾上松助、三津藏、佐野川市松、其外此藏之類參、狂言、草履打、岩藤に松助、尾上に三津藏、下女はつに佐野川市松、又菅原車引の處あり。

江漢が駿府のくるわをのぞいてから、十四年目の享和二年五月に、曲亭馬琴が東海道を上つて、京阪地方に旅行し、羇旅漫錄をものした、駿府滯在數日、その間に、また二丁町を覗いたのである、「駿府二丁街」の記事は、それである、二丁町の細見記を書いた、とか云ふ(安永九年)よしのや酒樂は、江漢の二丁町を、案内された頃も、達者で居たと見へる、いづれ江戸あたりから、爰に流れて來たものであらう、丁度明治廿年頃に、居たとかいふ、松廼舍露八のような人で、あつたかもしれない、駿府の名所、二丁町を見物した、江漢の記述に就いて、今少し解釋を試みたいが、その道の淺學である私の筆は、動かなくなつてしまつた、兎に角、二丁町の記事は、當時駿府の花街風俗

を知らんとする者の、好資料となり、野芝居のそれは、市民娯樂の一面を窺ふことが出來得ると思はれる。

(大正十五、九、四)

○此二日上野梅川亭と稱する複者合の圓寂所を
をひらく、余も行て見る、今俗にあつ来今まと稱
稼を交る、此出時(?)なるハ主とも酒肴ひとも早大
圓寂所なるも五五ハ(?)なり、稼者ハ此新(?)事なり
こゝ多し、余も夢の如き二十此一出ます、家花をうく硬
流と唐寺、圓寂のおと冬時紙の紙も出ます、金紙と
紙味をみます、此の時と紙の研究をなす、偶し榛原
紙屋の義之、来今まつき仙台も事時紙を使ます、
流れと香つ家ろう紙と新ろ紙と知らるるもの

楮原へ金子兼吾の新旅館を建築したるあと
を記したる底とし文化頃冨底の紙なりしが、木炭粉
出品の紙の檀紙に類せるを多く、中に清国御用紙定法
紙あり、支那紙譜あり、余が出品紙布譜あり、西班
牙法紙法の原書あり、フランス紙譜あり、日本製紙
法（英文）あり、古代紙集あり、古代紙と新製楮原
主人より行成と呼び来りたるものを指摘せる、松井翁
の小説を刷りたるものなり、苦しい古代紙と呼ぶ代
りに行成と云へしとなく、清国の紙なりと云ふ人供が行成
写ひす行くことあり、何人のことにも知れざるしかも
代紙のことなることを知り得たり、余は複製を今回
人と会談中、提議し、来る終末に現在の各紙之

十二行

紙の

ちを約五十種ばかりあつめ、それと紙譜を細く上頭に紙
をて印刷し、紙の産地や大きさなどを各紙に注し、飯
美を一冊とし、頒布中にかかべしとなす、今
場に東京博山の古陶器を出陳したる人あり、余の
花まるることを回国なり、此回の刊年不分明なり
が、赤城又次郎の説なれば永的なりと云へり、表
特甲の著ある外、書籍なるべき四三の証拠あ
り刊年漸やく多分なり、誰れかの流しを迎へ一九
の写箱論（こやし本）を内務者複製を禁止し
たりとあり、何れにしても無益を義務を主張すも
只偶しなりとは嘆賞と信ず、内国勧業局にて余
が説華い新山陽の話をすきつくりあるとい

徳帝の中央論と載せらるゝことは又以ての外なり、余のごとき者をして、徳帝に陪して山陽を非難する意味あり、其非難者と共に、余は笑つて曰く、徳帝の山陽を非難するは自己を非難するなり、山陽の缺点は徳帝の欠点（山陽の悪徳は徳帝の悪徳と似たるものなり）と、保と京都の新村塾生徒とを見て、新村塾が慧星と共に載せる書林内有堂を論ずるに、曰く、あるべきの内有堂の紹介はいうまでもなく、原文を引かず、簡の摘みたるに過ぎず、可なりと、赤城文学は北海書店の雑誌と本屋道楽の書籍の回覧を出しなるを駁しが今夜なる二階と書店といふ名称、あんハ面

十二行

とるべきものなり、接客室を書斎に存ずと、北海真名るかの如し、複製なるの木版を司る版木師の師匠某曰はく、の湿版を板に貼ることを教へ来り、塗り陶列す、余就て湿版をかうえらう剥き木に移すの行和法を学ぶ、最初湿版に薄紙を貼し、薄紙を貼んを剥き、之のを木版に移すあり、後板にデうテこを塗り、其と薄紙とを貼つけ、其上に美濃紙を置き、仕べうすと美濃紙の上を湯ちくコツと、デテテこハ其庭力の為に湿版外に溢出つ、其上に薄紙を元のごとく云るなること、北海仏書面に於て為されるを、合田某曰はく、彼はこれ廿五年前のことなり、余椿屋主人と就き

是か仰国の紙の名を称けて深、曰く内山、曰くゴ
ブ紙、曰く三立紙曰く大谷地、榛原皆其紙なり
いと、余い方言かと思くしる迦るあるべきことを知
んり、内山い美濃紙なるべく五ブ紙いめり入れるなり、大
谷地紙い硬質大阪なるべ、大谷地い美濃の地名なる
りと、余又紙と紙紙と紙、榛原曰く、紙と染める
い困難のあるべ、是よりすると金泥浸して紙浸ひ生つ
ることあると、紙と土粉れ粉とを混ずることあるべ
ゆ「ひ」のいきい土粉を混ぜしとる也、嵯峨野の島の
子ともも土粉混しあるべ、林茶樹粉茶の書
義の四文京師の俵織買四十八年ま柏如亭の抵掌
をぬくいるべるあるべ、如亭い京師と別題なるしと

十二行

林檎を、士の生立ち（土粉）柿と来り懐中するも三本を
ゑり出しこんもらひ木粉のとやくくのと元ると三角の外ト
ウを入れる小本形下のれの（はんかん）きるあると俵本なり、夕
トウの角三方を起すと彩色入書書なり、北ひるる古
ひ見ると回を換まる、余が筆中未ゑなりとて笑
て嫌ひ入る。

十月三日録

来城又洛中祭る京都のもの石蒜谷いもと寺
侍世なり智積院と属す、今も儀式あれいるる
こ別すること、香を焚米とるる其深が、京
師や京都のことき）寺院多く寺の勢力ある
るの寺世特多きも是現地なるひるる別し
多しといい、蓮谷の神田香義の所と不

香山蔵人西陣織屋の金貸也、其時屋敷を金を借りうらも利子あるく使うとゆふ、神田の富をうりとうる也、為めうるとゆふ事、後世百姓の作るかゆ、田の内四十町ハずと云へく、大分の十九梅田の墨の原料とする藤田を春日神社の燈明とすると云ふ、紀州を云ふ也、年若しと呼ぶ名ゆ梅屋也紀州の人、紀州の人、墨に縁因あり

金花糖屋業の作りゆ、その所有の販木全部

榛原の手を伝し三ツ倉庫販木を以

売ちうる震災の作りゆ、もこびうる場もくし

やうゆ文晁其他名人の板下を作りとるこの

十二行

ゆ、

伊勢屋を祭器をやく宝〻昔しうあり素焼び原

始的のこの作あり、何あるの婦人のみこんをやく、此

等の婦人を「ろうろく」と称しそのあるのく、素

焼の「ろうろく」を祭するかとも

こんも毒地の淡ゆ、本長宣とゆふ人の庭

ゆ寝と新ゆ、とする時ハ、つくゆ衣類を

梅山地、豆腐まもかチヤンと高を上

て豆腐つくゆ細心の人ゆ、ゆ所家の出るか

故ゆ、こんも木綿河原稲荷ゆ所家の

出ゆ作ゆ人に働ゆ、門人の多かりしハ

新受ゆ故ゆ、

○先日片山利八郎馬と産とを同じ花入に心の英
茶と祝六四個を贈れるが花入の就心を別
に贈り来るあるべきあるべし
花入漫筆古物語を閲するに名器を同じ
内と同じ茶祝の同あり茶祝の大きさも絵も金の間
なる茶祝と同じ北の間きい特と基北珠拂とあり
花入が贈り来る所以奉ひまづし　十月三の録
○一茶の句味あべきこと多し、一二を抄す
蠅又蚤の跡数くなるこれ源氣孔
いくら咳入るのぞ近あるよ雀の子
寒さを先へひそ
時鳥や鶴を はひびるるものの心

十二行

別

五月雨の弟も蛍なりけり
住清水は月と佛とおらぶそば
訃世
からひかからひいれうつるちんぷんかん
○酒飯は古くより延喜の朝あるべきなりと
見へたり

延喜十一年六月十五日亭子院にて酒を賜ひ勅して三十盃を限りとす。
召に應ずるもの八人
參議藤仲平　兵部大輔源嗣
右近衛少將藤原兼茂　藤原俊蔭
出羽守藤原經邦　兵部少輔良峰遠視
左兵衛佐藤原伊衡　散位平希世
亭子院は宇多天皇の御所おりさせ給ひし後の仙居也三十盃は三升なるべし

○西郊人なの集まる都下の大黒湯店を毎日掃
除して得る處の塵埃の内より一握と為る陰毛ありと
也りを農林若樹に得ると共の二ゝ、有馬の湯よ
すい浴槽を掃除する毎に固より沈澱の垢と混じん
常あるもの陰毛を考へすと　十月三日記

○十月四日　神田の古肆にて得たる左の圖書を購
ふ

一 學範　一冊

西家中林竹洞の著書あ
り皆自筆、跋ひまて家塾蔵也
余か架中既に四五種の著書を
蔵す、此學範亦竹洞の著なり
趣味こうこの子ならる竹洞の全集
を纏羅せんとす此書亦欠くべからず、
竹洞の見識は他の著書より類ある
ぬと此書尤も其の以て強きとトし得べし
きとあとす、巻尾に和歌あり　天保六年刊
後の世は志る人もこう家國の以て思ひ是[illegible]深き心を

一 木鶯之道　一冊

嘉永三年　月郷の著かしるゝの
江戸にも木鶯を飼ひしるゝ道々
を七五調に書きなしたるもの、手
本とせる擬しるゝ大字なる[illegible]
作なりと刻しある田舎[illegible]なりとも[illegible]

本也

一五考集　上下合一冊

東坡外四先生の八陵集を珍らし
かりさうなれども、これを寛永活
字版にて篇数のままとす

一舊注蒙求　三冊

北者龍田彫爲の諸書を海狐し
て雖校しる所、普通徐氏補注と
異なる為め舊注の名あり、巻首と
彫爲の校勘撮要九枚あり、巻尾

十二行

に考異六枚を列す、彫爲が校雖の益
本とし給ふこゝの彫爲家義の舊物
本なれども四百年前のものといふ、巻末と
豆州北條僧月渾自筆とあるのみ、徐
氏本と同しからざる所と北者の價値あ
り、今北刊本甚稀し、蒙求を玩ふ
ものは北者の存することを知らざる可
ず

一大寶壽大梅禪師語録　合一冊

大梅は京の保寧の高僧なり、嘗て火災
の為め其書を失ふ、北者遠前を

翰録し天保七年信濃伝久郎蔵寿
山正安寺と称し出版の様に係る

一酒経　一冊

大隠翁撰述所、宋本の覆刻にて
朱刷本也、上中下三巻を合冊し特
徴い醸造法を詳述したるもの
糸か架中酒書若干あれども造
酒法に専ちることあるも、此書架
中の珍とすべし可也

○舎前月新潟港より社に勅令ありしの法初年の

十二行

新潟港に於ける各船の積荷項を消滅しこれを紙
上に掲げ他日の資料と供すべきを以てしたるも
如先多くこれ今日法の初年を知るものなりと
雖も其数甚だ少く全為めに十数の海産物
消費税法を業務せしめ、これを紙上に掲げ以て
範を示す、後世の人これに倣ひ、
料として連載するもの、余か前に掲げたる物産の
ものとい大いに異なる所を異なる
生産未だ見ざるものあるやを詳ふるもの、或い倍の
社中のこの法方に倣ひ業務を進め
辛先奨勧其効を
ばせらるを得す、

十月四日録

〇一 故味あり追懷

1 埼玉県人の別荘に泊りて

2 道遥公と語る

3 芭蕉翁の句碑

4 高野国雅集

5 光悦寺を訪ふ

6 正倉院に国一十年を経ます

7 和歌山人と嘉後の金長

8 吉川義次郎と雨中に飲む

9 野崎武吉郎を訪ひて樽酒を解く

10 康有為と飲む

長崎

11 幼時元比前屋と奥平
12 親類に朴訥者と人多す
13 五色の旅
14 高崎森氏と語る（未完）
15 印の結婚
16 育姪の校に馬場を薦す
17 珍事 同宗会
18 寺校 天神講
19 中井敬不を憐む
20 修繕 寺の鐘楼
21 京都半夜の一夕 信樂
22 風雨

十二行

二 図書法等抜萃

1 北陬雷鳴の安殿さるべきや（未完）
（山東京山と乾斗牧之）

2 図書館の不備と補足の二安示（未完）

3 燉煌石室の図書を観る記

4 彰考館と作る記

5 高麗花瓶に就て

6 浴世絵と社会教育（未完）

三 鐵窓舊夢談　長篇

余が青田監獄に在りし時代に於ける人情の一斑を綴れる紀行文なり、これも補正を要す

四 喜外錄　長篇

今の喜外なるを説く十数年前の著作を修補刪正して稿成る

五 鄭所錄　長篇

文体漢文崩しなる舊時の風なり稿正を要すれども未だ着手せざるもの

以上紙数第一隨筆と同様の仮定(二)(三)約二百頁(三四五)約百五十頁計三百五十頁四百五十頁となるべし尚百頁を新加するものを選ばさるべからず

一明治初頭の田舍漢

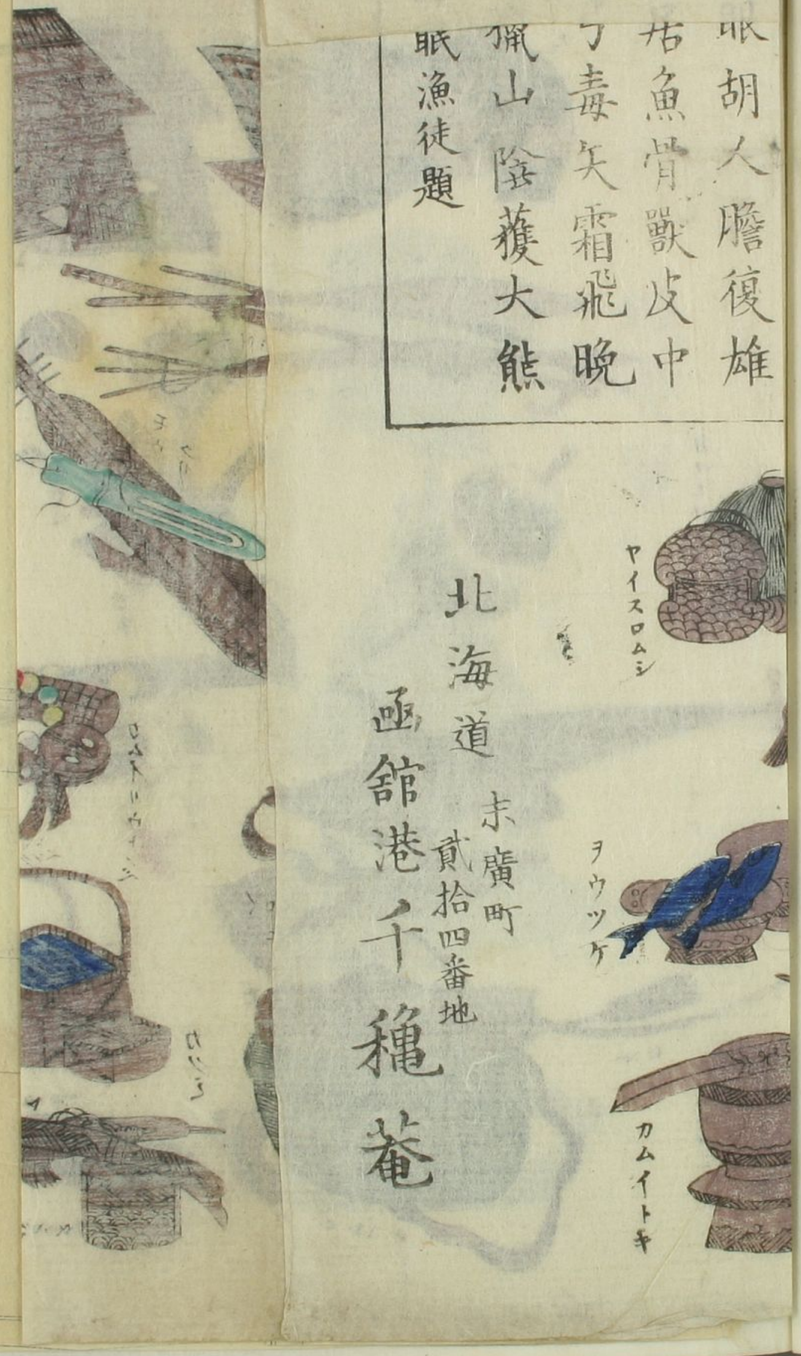
一故郷漢揮毫

をかくて百頁となすべき数前者の文の場合の紀行紀録と收めらるべきもの

稲を蒔すゝ、後者ハ矛一隠葉〻の雅俗相半
紙に漏れなくこゝあらう　十月五日記

○山本書庫ゟ一二の反故を賜り来る、雑書を
焼ひゝ内に挿入しあるゝゝといふ、飯島氏の
一枚摺、無数所ゟ所所ゟ所、浅草文庫の
図ハ支文書ゟ、北文庫のゟ後と工業
校を建つ、金が弟大時代志ばく図書閲覧の
ゟゝ、汚ひゝゟ京ゟゝ、北秋祭と建築図をゟる
ハこんが坊のもの、米庫の地を一部割きゟゟ

十二行



北海道　未廣町　貳拾四番地
函館港千穐菴

眠胡人膽復雄
姑魚骨獸皮中
了毒矢霜飛晩
獵山陰獲大熊
眠漁徒題

碧眼胡人膽復雄
占居魚骨獸皮中
短弓毒矢霜飛晚
狡獵山陰獲大熊
一眠漁徒題

蝦夷寶

北海道 函館港千穐菴

未廣町
貳拾四番地

校を建つ、金が弟大時代志ばく国書閲覧の
ゆえん・汚いゆえ高ゆえ、地積弟と建築図をえる
ハこれが坊のもの、米廣の地を一部割きなるもの

十二行

稲とあすゝ後者いと者一隠蓑の雅俗考
物ゝ漏れなることあるべし

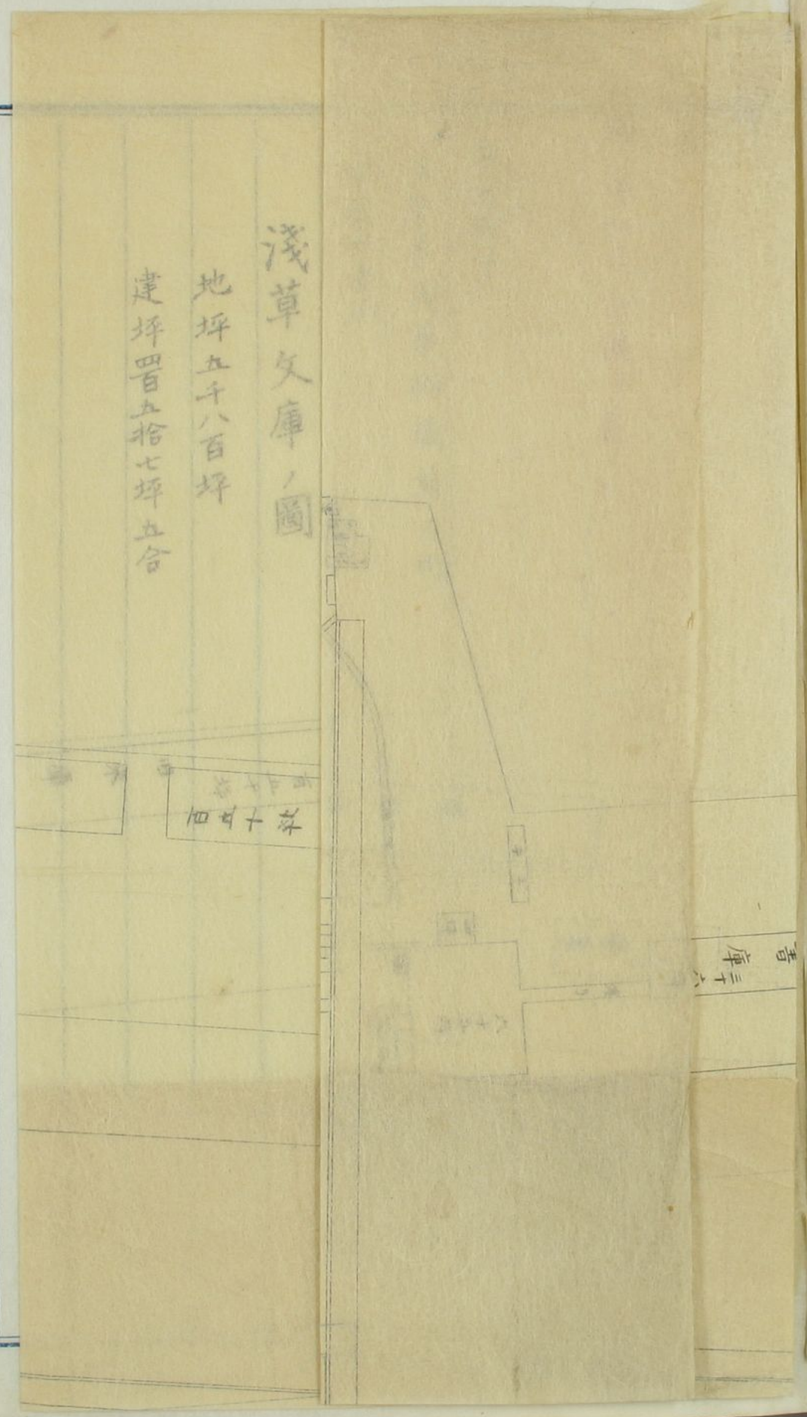
十月五日記

雅俗蓑

浅草文庫ノ圖

地坪五千八百坪

建坪四百五拾七坪五合

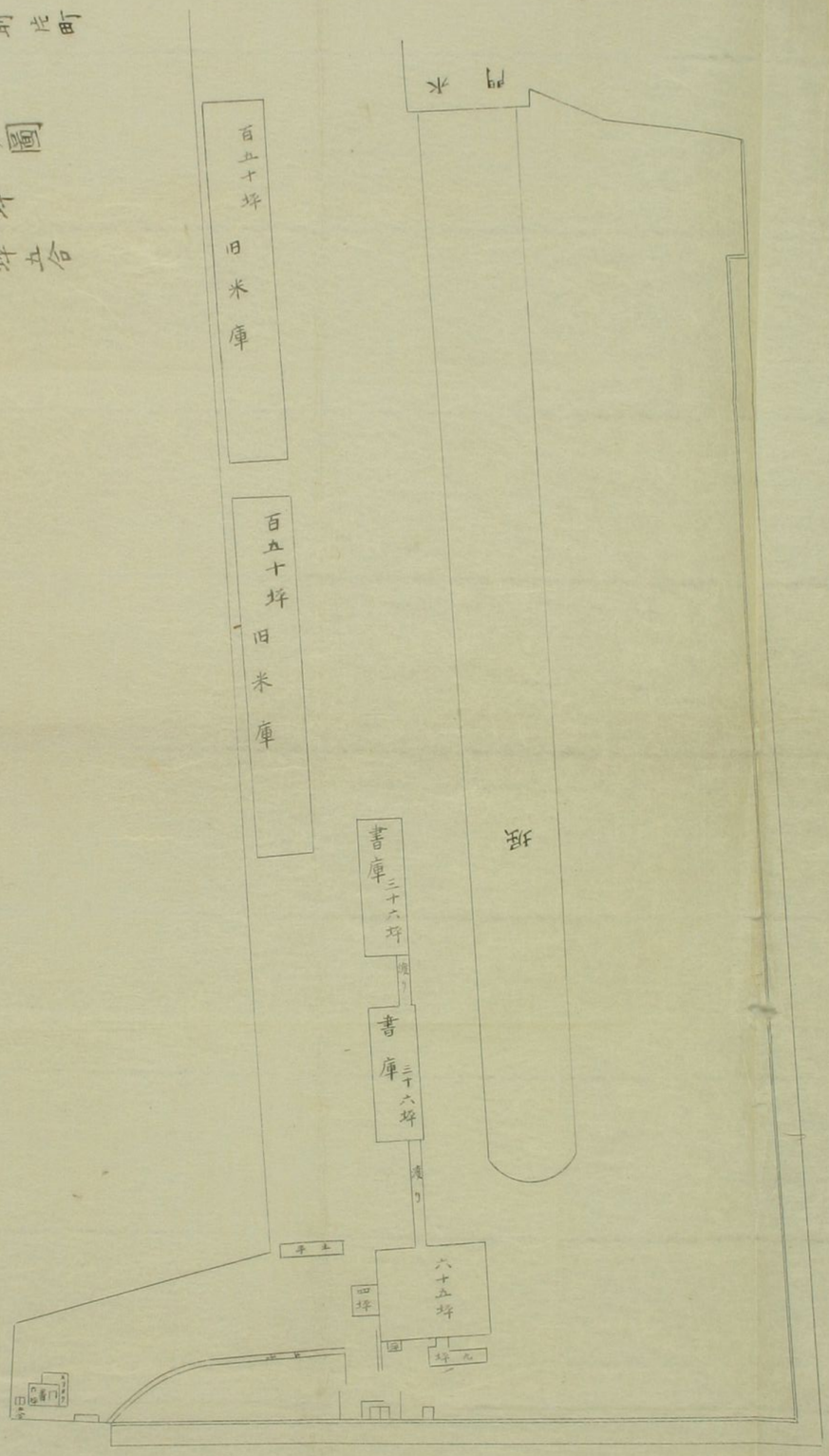


此圖ハ會計局ノ合議中ニ載ル所ノ

東京府下
淺草區淺草御藏前片町
貳拾九番地

淺草文庫ノ圖

地坪五千八百坪
建坪四百五拾七坪五合



稿とせんすに後者は第一隨筆の雅俗折衷
明に渡れるこころ

十月五日記

戴粹四十餘年合
數千六百餘

淺草文庫の圖

浅草合番地
淺草區淺草町瀬戸物
東京府下

圖は會津屋合藏中に漢ふまく

御年貢米幕府米摩

御草高九万三千八百石

内訳有用地

三万五千石四十三万五

御草高内訳

文政有用地

五千八百石

○新刊の稗史書と土地の名産と出づ

流田産山領といふ人が侯の御用にあつて秋山久忠から文へ以談話を筆録したものである、其内から一二

を抄録する

侯の山陽廻を先代のそれを継ぎ以来とかく

本藩の儒者貫浦萬次郎と山陽と

親交あり、山陽風の書をかくに、侯は其間より

のうし以から、書も山陽風であるといふ

侯の義歌も数々あるを和歌うた何時も豊信と
云ふ実名を用ゐ、和歌所の書うた正式の場
合うた出座等の歌には、号川と雅号を用ゐた、号川と雅号
の時分うた武陵叟人と書き、京都に住家した
ゝ頃は借庵先生と称んと雅し自から大酒
家を以て任じたい五平士人生とも雅し、お
時の部うた八仙堂と雅する号があつて桂号
に八仙人の画があつたのゝ八仙堂と後歌
ハこともある、前書きのうちに直養と後歌
さんたうある、亦造に羅つて命へた時蘇笑
笑の戯歌を用ゐられたこともあつた
侯は今人の友と親角すると三升の酒量が

あつたといふ、日根野山頼支峯頼立斎とは
特に親しかつた、酒は清の酒を好と愛したが
山かいつも根うたと酒肴を好参し、その酒の
外能きうたのを侯は器あて清の酒を
まもて見ると乾酒うたん賞味を逃る、自用
の酒を好ちまのこと及ばすと云ふから酒肴を
無節しうたとい為ても出て
ある、
侯は山陽の詩書を尊すること甚厚く
中の三ツと湯ちたといふ、山陽の書し扇を
乞て掌の離さず人きうのあで「許由の捨る
所我須て拾ふべし」と記してあつたといふ

○山川健次郎男から奥平海舟のことを聞きたいと乱かい頃から思つてゐたが、其機会を逸してきたことは奥平の刑死五十年に当るひとりを機会に男の奥平と親しかつた浜崎俊郎二郎つてきで出てゐる、自分の卵園の関係することもあり、知らんと欲してゐたことも多のつから解つてから、アチラコチラを物語する、

奥平が佐賀、北住しの、其二十八歳の時で、城後府権判事となつた頃で、高時兵馬の推挙で附属した、月俸三百両とした

山川等が新潟に滞在まもなく、其時初めて面会した事と伝聞

十二行

八俸いれた、河原田の佐賀藩の役者附属の長官ミ一重あれた、そして義海と仙蓮から其をみた義田と云ふ傳説をつけられたので勉強と充分便利とのが其面白さ、山川等が今月の諸情報を役立しにこの話判が立ち、奥平も北評判の国つて新潟こはいれ蔵の表遠義七郎と托さんと佐賀の出ることを僅うの一ヶ月であつた表遠義珍らしい義の家であるから勉強と便利があるといふて托さんと、表遠義の大左尾氏の役目の兵を其ら北辰隊といふを編成し安国を接け、表遠義の其源出を宣伝日清戦争の役人として佐賀の出であつたもある山川等の表遠

勤方することを約六ヶ月で、奥平を東京へ召さ
れ、それから明治二年の八月頃で、奥平は僧侶在
任中多くの寺を毀つたのが中央政府で發せられ
とあり、寛文の爲めに罷されたのであつた。其後前原
は深川萬年町の吉野屋家に居た、奥平の寓
山川が之を伴つて見るくまことに困窮し、急病となり
周く悔へらるし時、吾々は訓戒書に老荘韓非
鈴録の四書を読んだ、元来奥平は徂徠の學
説を喜んで常に徂徠の書を読めと奨励された。
別して時々品川(山川)兄弟)つれが、今一たび越後
の遠藤の居候となれ勤めてれが不孝
~~此者も此不好であるのである。~~ それから明治四年

翌月洋行することになつたが其後奥平の上京し（八年まで帰朝し之れ其後）
たことがあつたが山川は終に遇はなかつたの
で、品川と逢つたのが最後であるといふ
山川は奥平と別れて再び越後の遠藤に身を寄
せて居る内明治三年と今度の仕事がついたので上
京したが、警備と北海道開拓の爲めの人材を選
集して居ると知らし推薦することとなり山川
も其選に入つて洋行したのが後に政府の方針
が変して其の滞米に致した不幸の難義を凌
ぎ明治八年に帰朝し開成學校の助教
授に任せられたのである
奥平の僧侶行政中毀佛廃寺に就ては前原も

内心共の稿藁を試み一冊を奥平に寄せ其
ことゝ心に載せてあり、亦歌の記の如中終に教
国宣布し以文の活奥平の得意の業にて
奥平の刑死に先立ち、排判官岩村通俊と相
面会を乞ひて判決に就て一言申述ふ自家の
文章は後世に伝ふべきも名文と信ずるが故に
埋滅に員ぬやうしたる莫れと嘱したりとの
奥平の文の自負は大なりと云ふべし

以上要略を録す

十月六日記

○昨日国書を過う一二を得

一 太古遺音 一冊

刊年を闕くも明の葛麿の刻と
覚ゆ八行本の琴譜也巻尾に左の
識語あり

明心越禅師の遺本
天保十年巳亥春三月 獻納
豊田銀花政敬

水府舊花ちること巻首印記を掩
り知らる、彰考館に納まらざる者の散
佚しなんと見へたり

一 古義堂遺書解題 一冊
伊藤善韶の編する所好学本也

首に尾と主原書所の印記あり

一　天造物の利用　一冊

田中芳男の講演筆記を印刷したるものなれども巻尾に多くの図を刻す其者自から朱墨を以て自校訂したる所あり

一　石燈籠図譜　二冊

珍本なるべきものなれども如何本なるや

然れども異なる点

一　薩国南海航路　薩州の形勝の地を隨所に記録し今之を也薩国を又分から路程しもの記載なれば録録なる味あべきものなり、如何本か　一冊

一　作者不詳測量書二種　物價餘論　筆書　三冊

混同秘策　二冊

前者は明治十一年未出版後者は明治二十三年九月出版せし経国の書也

㊟前書の元版紙前守の諮詢を受

して此りなることあり、後者は四海併吞策なる論説の痛快也、都を江戸（一名）すべしと云ひ湯殿を日光の有なるしもるい谷なりと云ふ後者は卓見なる時後に事実となる卓見と謂ふべし、北混同策は維新の事時四藩閥の宰臣に満ちたる大久保の北考を淡ちも江戸を東京と定めなりと云ふ、又海江田信義は明治十二年特に北者を三大臣十参議の閣議に代せんとせり、余此時信淵の説を聞せし也

書に及ぶ、購ひて案中に置く所以也

十月九日記

○五十公墓地に新墓の碑面の四字（毎量寿院）を泰山の自筆にして既に石工の手に渡せしと聞く就て柳瀬の言に「墓碑の漢文を識るといふ任かも識るべし智永の千文を学ぶも書を捨いもて験すべき筆画粗精なるべし、況んや石工服刻に苦しまんと智永を捨し、あらず裴休の圭峰禅師の碑本に就て字を集めしなるべし今日一見すべき也合考して可なり、裴休の柳公権

同時代の人々を能書家の名を以て呼ぶのみ、隨て碑面を拓することも無りしが故に字劃消滅すること、唯だ十六字北の碑の如くの甚だしきを見ざるを得ざる也

十月九日記

○宮樂が突如浮世絵の面顔を一往特別の筆にて描いたのは何のためにか、浮世絵の役者に媚び、役者を憐憫するに媚び、絶えず美化することを以て中心とせるが如く、役者の顔の癖を云つて役者をいやからせたのは如何なることにか、宮樂は能役者の面を引き前代すい不受不施の信條を固守したるなる

流罪にされたものがある、宮樂の物狂ひ等の系統を引いて物狂ひ、あるいは解し得られるものもあり、役者が時流に一風の面を心つけと解するも差支あるまいと思ふ、されども面の淵源を明かにすることが出来ぬ、彼の誰の書を待て教いつたか、それ迄はハッキリ判らぬ、又絵を書いた時も時代をあらはさぬ、唯宮樂の経歴をいろく研究する人のあるけれども面の淵源を説きぬんばあるまい、但し一人丈の説をきゝてゐるあるかあるまい、一説には其浮世絵十八考と称し、宮樂の絵を其の家のものとあるべきなから寺社と道徳し、彼の能の家と生れ

れて居る能楽の面に親しみ深い強烈な感化を受けたのである、能の面は役者の顔の線、単純な色、固定したものであるようで動揺してゐる表情から自覚せる偉大な感化を受けたのである。全体の配色もやはり能衣裳の高雅と大柄な調和から出たものであるまい、音楽といふ名も親しみのいろ〳〵の説があるけれども能楽を写すのといふ意を解する方が當つてゐるやうにも思はれるといふが、其説の大要である、なほ音楽の音は線と云ひ色彩と云ひ仮面能衣裳から脱しかたを思はるる点が甚だ多いことは何人も認つく所である、何とはなしに

十二行

もの家の者のと感化を受けた潜在的努力と芸術と現はるるものである、私の学つた光琳の立体の像は色彩と特徴のある源因を此から移して役者が能楽を研究をする所から立体さんとといふことがあるが、音楽の像と親しみの一度の説に賛成せる点を持つ。

十月十日記

○あるる前出めを仕なして毒後湖池の葵殿の映画を見る西洋の蜘蛛とのお映画の仏国の心とそれは頗る悪どいものであつた、あんなものを無けれ此の人今日は刺激を受けなくて、親後の遺族も嘉しいかうした

日上記

佛蘭西オーペル映畫

女郎蜘蛛

九卷

阿佛利加にある佛蘭西駐屯軍の少壯士官が內地探險に行つた儘往々にして行方不明となるので軍隊では有悉る機關を利用して探したが矢張り無駄であつた。一九一〇年頃マツサルド中尉がガマラの井戸の附近で姿を消した。一九一三年の夏セン・アビイ中尉は左手に大負傷を受けて砂漠を漂泊つてゐる所を救はれたが同行したモーラン大尉の行方に關しては一切不明であつた。セン・アビイ中尉は入院中不思議な讒言を口走つた。彼の全治後同期生のフェリス中尉は彼の怪奇的な興味ある物語に心惹かれて切に同行を求め或る日南へ出發したが永遠に二人は歸つて來なかつた。

モーラン大尉……**ジャン・アンジエロ**
セン・アビイ中尉……**ジョージ・メルシユール**
マツサルド中尉……**アンドルー・ロアーン**

サハラ砂漠が未だ海であつた頃南の方にアトランテイスと云ふ美しい島があつた。九千年前の大地震で海が砂漠と化したが此の島は砂漠の南部に永遠に絶えざる泉に惠まれて外界との交通は全く絶たれたが今日まで殘つて居る。此の島の統治者は代々女で現代の司アンテイニア夫人には既に死した夫が二十四人あつた。

世にも魅力ある女で一度逢つたが最後總べてを忘れさせられる**アンテイニア夫人**……**スタシア・ナピエルコウスカ**
奴隷の小間使**タニー・セルガ**……**マリー・ルイズ・イリベ**
王廷の記錄係……**フラン・チエステイ**

二十五、六番目は兎に角モーラン大尉とセン・アビイ中尉が第二十七、八番目の夫として此の島に迎へられたが爲に此の怪奇な悲劇が生れるのである。

◆原作ピエール・ブノア。監督ジャック・フエデー。パテ社提供

セン・アビイ中尉……ジョージ・メルシュール
マツサルド中尉……アンドルー・ロアーン

サハラ砂漠が未だ海であつた頃南の方にアトランティスと云ふ美しい島があつた。九千年前の大地震で海が砂漠と化したが此の島は砂漠の南部に永遠に絶えざる泉に惠まれて外界との交通は全く絶たれたが今日まで殘つて居る。此の島の統治者は代々女で現代の司アンティニア夫人には既に死した夫が二十四人あつた。

世にも魅力ある女で一度逢つたが最後總べてを忘れさせられるアンティニア夫人……スタシア・ナピエルコウスカ
奴隷の小間使タニー・セルガ……マリー・ルイズ・イリベ
王廷の記錄係……フラン・チエステイ

二十五、六番目は兎に角モーラン大尉とセン・アビイ中尉が第二十七、八番目の夫として此の島に迎へられたが爲に此の怪奇な悲劇が生れるのである。

◆原作ピエール・ブノア。監督ジャック・フェデー。パテ社提供

○芳飾北斎が天保五年刊行せし『富嶽百景』三冊と
左の如き序文あるものをみるに、
七十六歳なる我の形状を言の癖あるに、よりて
しばく画風を頻りに改めしいくたびか、七十年画く所は、
実に云ふに足るものなし、七十三歳にして稍禽
獣虫魚の骨格、草木の生生を悟り得たり、
故に八十歳にして益々進み、九十歳にして
ますます奥義を極め、一百歳にして正に
神妙なるべし、百有十歳にして、一點一
格生ずがごとくならん、願くは長寿の者余
が言の妄ならざるを見たまふべし、画狂老人
卍述、

北斎翁は陽明一廣の浮世絵十八番と称せられし
所にあらず、こんが英文作文に、英仏の蘭
術家を驚倒したりしは、左もあるべし、一日廣の画を
蒔りし方くは北斎の筆に於ても然りとす、彼の
高尚雅趣は北斎に比べ、彼の高尚は
の進むるものなり、彼は長寿を保ち、蘭
うて和漢薬を重物とせり、彼は蘭に於て大の悪
しき気味をのみ去るを学べり、彼は狩野
風を得、又唐画にも手を入れ、司馬江漢にも
を描き手を一本つゝ筆を揮ひ、何やら彼は漫画
を揮ひ、こん蘭自身の画の淵源を探るべ
し、彼は五本の筆を遣ふ、

書法を学び、之れを唱導して自から一家を成し、学業
九が為めに遠くまで可きを有する所の実に偉
なるかな、

○此の坊写と国書を通ず「切口大辞典」と題する洋
装本を得たり、切口の二字初めて見る所、未だ支の何
人の辞典なるを知らざれども、支那の俗語
辞典なり、俗語といへども俗語にあらずして、
各業学術の術語なり、切口とは即ち元也
此書全国各界と冠し、目録挙くる所を
見るに三百七十三業に渡つて支の術語を挙く、
如斯この支那と立つても必要のものなれば、序
に就て見るに往来必要あり、而して編者なきに、之

れを編纂することの難かりしを伝へあり、日本
の特色各業とも習慣語あり、門外漢之れ
を文くも陳芥薄言作する所なり、支那の術語
ハ元も多厳も、之れと交れる漢字を以つて日本
流に其物を推測し得べきものの九十九を占む
乎庭注脚を欠いて解し得可きも、此のこと
きの俗語用典ハ今後支那に指のるるい我邦
のも又要あり、此書中華民国十二年一月上海東陸
国書公司印行する所なり胡漢韜の編する所也

○三国志演義の版ハ幾版を以つて重ね出版
とす、坊間或ハ流布せざるものあるも人よく弗する
ものなり、陳日文未だ一書を洗出し得て

最古の版とす、一千四の價を以つて買うべしとし、
其見本を作り宣伝に来る、挿画古拙なる版式は
正しく明末清初、書林の習慣なり「明書林周日校刊」
行」とあり、他本と比較して異同あるを知らず、
愛に収めて他日封照に資すべし（十月十二日記）
尚曰く、北本普通演義本と同しからず、日世
に流布する演義本は北書を底本とせるもの
なるべし、北書は七術數多きこと知る
べし、北書は三国志正本と如説三国志の中間
の書と知るべし、

十二行

新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義卷之一

晉平陽侯陳壽史傳
後學羅本貫中編次
明書林周日校刊行

祭天地桃園結義

後漢桓帝崩靈帝即位時年十二歲朝廷有大將軍竇武太傅陳蕃
司徒胡廣共相輔佐至秋九月中涓釋義中涓宮中掌事之官官名曹節王甫弄
權竇武陳蕃預謀誅之機謀不密反被曹節王甫所害中涓自此得
權建寧二年四月十五日帝會羣臣於温德殿中方欲陞座殿角狂
風大作見一條青蛇從梁上飛下來約二十餘丈長蟠於椅上靈帝
驚倒武士急慌救出文武互相推擁倒于丹墀者無數須臾不見片
時大雷大雨降以氷雹到半夜方住東都城中壞却房屋數千餘間
建寧四年二月洛陽地震釋義洛陽郡名今河南府洛陽縣是也省垣皆倒海水泛

曹操敗走華容道

東手忙奔月落猿啼腸幾斷

抱頭遠竄天寒鴈度淚雙垂

○故早速花木の遺子より一枚の写真を贈り
来る亡父の遺命によるとあり、投ずるに忍びず今
春田原の未亡人を大隈侯に紹介し同人と田宮の写真也余為めに写真左の記
を録す

北堂玉早速整爾其間に入り後大隈
侯と田原某未亡人弟と遺子を伴いて
謝恩の為め大宮を開きたる折の撮影
也早速去年時田原の家庭に教育
を受く其の其間に別して田原と夫
の所有なりとも此巻の後数月早速一
疾を獲て逝く起居の写真は乃ち亡

十二行

後の撮影とす亡者遺子に命じ
て亦等同人に贈り以て亡人の追傷の
記念に資也　大正十五年十月十三日

○昨十二日文部大臣の協議の時に茶飯会に是羅
公使来久次郎を伴つて同席の栄を賜
く

是羅の首府いもと繁栄府なるあり人口
アエキヤにあり三百年前山田長政や天竺徳
兵衛此国に渡航の日是の交通盛人なり
と其頃日本人の彼地に多くありしこの人なる人を
以て多く其後徳川氏鎖国政策を取

り生ずる結果日本人の彼地に在るもの実に絶く今日僅に三百人を数ふるに過ぎず、今日彼地の事情に通ずるもの内地に実に無きに至り疎隔の関係を生ぜんとす、南洋地帯に列国の統治の下に立たず、独立国たるハ唯暹羅国あるのみ、既往の歴史を按ずるに此国も外国の為めの困めらるゝ所となり、千八百九十三年より以降十年間仏国の侵略を受けカンボチヤを割き仏国の領土に帰せしめ、暹羅国の一部を割き仏国の領土に帰せしめたるのみ、而して暹羅国の外交困難を免かれんとして英国と秋波を送りしか却て果て千九百九十

十二行

マレー半島の三分の一とビルマを英領ならしめ

得さる不幸に陥ること

七代ラマ国の国王ハ聰明なる君主にして

四世ラマ傳らも位に即きなる人となるが此人特

に英主にして外国との交渉の事情に通じ

し居る事頗る明らかなり此国の政治初年こそ似て

ある所四世の事ハ又我政治に似たる所が

ある、同国王ハ上流階級と下流階級とを以て

中間階級のなきに至るが下流階級に属する

奴隷なりしも此事に依て解放せられ

銃手勢利権を回復するに至りから

端を開し三十年の歴月を経て漸く

日本を進ませるように我国のそれと似てゐる
近年即位の第七世の現帝も英意を行政改革
現政政策に鋭意して先づ一千二百番目
の皇室費を減じたりしも此帝なり
是羅馬の二葉にして帝室の常
として農民懶惰の為め全く進まず支那
南のそれと農業改革を試みたれども戊辰南
人は農民の窮に乗じて貸を貸し、之に高
して農産物を金と代へて取めるを其の敷
の利益は実に莫大のものにして十割或は
以上にも及ぶの有様なり、此等高人の現在
の数は百五十万人と上るといふ

十二行

日本の将来と新たに日本の着眼すべきは農
地なり、今日の耕地は一反十二三円にて
すむことを始めて日本流と新たに他を始は
さうす精米まひすんが三割以上四割の
利益は確実なり、政治人は米の耕作
無任所なるが為めに此地利は日本人の先
に元祖さんあり、農作の改良は彼国の常と
なりたるも大切なることなり

支那は廿八回も出うけて帝と支那時代に着
けたる後蒙朝時代を交的場合の結成合
に印して支那族を二時代に分つて敵味

し此支那に新たに出来いらくの人から実地の観察を聴くてみるのと、大略理解もしてみるか、海石に尤大の国土で、其の国民性のことき日本人から見ると特度の生来かある住ようでハ人々の観察い各々相違もあるけれども大体ハ何人の観察も同一てある、後藤の話しも輪廓ハそれの理解してみる通りで、格別異つてゐるなく共い海陸を兼ねるるも及ばないが、自分の頭に印象を基く此急所ともいふべき所をあらまし書くてみると左の如くである、

支那人ハ国土といふ観念が実に無い、彼等が尊ぶ社会である、一つハ

国土が広う大きるきるからでもあらう、それと支那人ハ本国を離れて世界中に充満してゐるから、彼等の住てゐる所ハいやが上に甚だ広う、亦多数国民ハ地国を知らない、其の国も自国の疆域も知らない、尊王の念が絶対に無いのでも自由もあるまいが、日本海の会見といおのつかから別でもある、日本海ひい寸土も惜しむの情がある、国が狭くいさいから、でもある、支那ひい敢て愛惜しないが、尊つて西太后が大切る装服を大つた時る支那の国土の三分の一も代りる出しんのから

是非彼方へ出してくれと我伊藤院に依頼
したことを伊藤から支那人に時々あること思
つたが土地に居る支那人の観念の一端が知
れる。支那人の理想とする所は歓楽を始める社
会、此から歓楽の前は国家は無い、自国家
が危うくなれば歓楽もないとなつたところで
初めて国家を愛する念も生ずるであら
うが、そこまで行かぬ内は国家観念が無い
彼等は兎角すると租借地の名義を唱へ
ては、租界の撤去を主張しようとする、こんとも
も実の望外交上の排斥する事は上海
天津あたりの租界は彼等が国籍に関

十二行

て自衛上家を失ふ
事を恐れて志向き憤慨
するもあるが撤去を強いるべき外国の
租借地になつてゐる所も実は毎有邪無邪
なしと言はんとうもあると日本人も
共渤海癖性に駆られたる言葉とも
するは、又言葉するのは馬鹿正直で支那人は心
天つてゐる。支那人は騙し其他色々のものを
拵へ出しても法外国のら金を借りてゐる
個人の見る目は甚だ彼等に金が出るんで後は
破産をしめかと為の為に彼等の忍
理は全くあつてゐる。外国人が金を貸して

も初めから支那の高い思かまへ、債権者が窮
極に迫る印を押すもの（抵当）ばかりを取り
やうまものことい高利をくくり いくらでも多く
借りる丈が得だとおもふ。支那人は昔し
墨のやうなものを使ふ。陶器さへ細胞のや
うな社会主義の血が流れてゐる。ブルジョアを
悪い番犬と考へ、共産を以つて債
権者をブルと考へてゐる。機会もあらば債務
者を殺さんとしてゐる。貴内君の富者
に対しては土匪や馬賊が侵略するのを
見るのいとをいとは思はない。大洪水
でもある。富豪の故負の為め武者国を

十二行

富の階級へしと立て標榜するのが例である。侵
略を恐れるからである。其実北金と義勇
ハしるへ、日本のやうな約束後りを迫るよ
もるハかる有邪無邪でもうそ仕方なし、こんも
支那人であるから、プロレタリヤ対する搾取
の一端が窺はれる。支那の富豪は陶分大きい
ものも城廓のことき堅固の家をもて実る
武千の私兵を養ひ護らせてゐる。それで
ゐて一又と言ふもあるが、毒のことき
ハ絶対寝所を変更して危難を免かる
る波さとしてゐる。ブルジョアの立場ハるう
く困難である。

支那に大家族主義の行はれたる一つの理由は
敵に対するの必要もあるからもあるが、大なる家族
となると実力ある人を数くるに、彼等が主の死する時
部下に何のような何のようなどこの比寿もあれば彼
もあるとも極便利ともあるから、家族の多
数団結を大に便利とする、彼等は政府の微
弱なる政権を頼るを免れず、自衛を図
らんとしてみる、上海の哈同といふ大なる
家族組織がある、會館と云ふくるこの一郷
の団体で家族ひいきの人とこれもあれば自衛
の機関となることよりも其数は実に驚くべし
ある個人なる組織の発達進んで

十二行

みる、
此の社会組織から人心を支配したるは
道教ありて儒教ありて儒教は士大子
のみ教の範囲に行はれたるのみにて道教
は一般の人心を基礎から支配したる迷信
の深い意味を支配するに地位を有力
である仏は又事実道教の社会事業
をなすに出来たるとみて国民を強の渇仰を
するものがある、
道教も脱脱(?)徳を発揮したるものがある
村山郎と云ふる人情美はしいものがある
あるは北京に都を定めこれに於ては是一変上権吸術

数が寡を行はんと、日本人とかうえんすと支那
の国民性なると判じ難きものがあると謂
はせしむるものがある、彼等の交際術は世
界無比のものなり、表主の比交際はあるも親密
なれども其の裏面は全く異つてゐる、えんを異つ
てゐるのは禍根を許さざる異が
ある、彼等は大国に生まれた丈に誇りある気
質で何事も極点やうまで行はねば止まぬ
性質を変でえんりうも物換する、今まで立派
なロロレメリヤ方であつたのが忽ち意を
得ると打つて変つた態度に出る、林兄弟
とまでなる、此の例は多くある、戦争とても日

本の如く極に達するまで進行せ
を以つて爆弾を投ずると宣言するかと思
ふと突如何の日習日延をするやうなことも
やる、彼等は全力を以つて敵の兵力を買ひえ
つりする、徒々土匪馬賊を利用もする彼
等も利を因つて城壁に使いれる、費用をするも
なお連中も随分腕手を微妙をするが仔
細あつて寛大のこともある、等の寛大と雖し
も謝礼が見られまず手を入るかぐでもあるまた
て裏と表とがあつて正直性のものもあるまた
度すりうちすることがある、
支那の書いはゆるものの文章はとふものの

現今、支那に大小の論議あるといふも一種の真理を蔵す、土匪馬賊と一概に排斥する莫れ、支那の文弱を憂ひ、西洋を超人ひ物つた所売ち年を日も遂かれ彼等を発揮しようとする度胸の足らず、役等目覚めの気を発揮国の志ハ無し、内乱すんば内憂、傳ちん ぬすむ ならずんば外患、一説に、支那の多乱を年中行事とも、日本の新多に大法家を以て仕めへ大乱のことときも、支那の廣土なハ冷眼視しも関係なき所ス柱ハ第岸の火災を見るよりも無頓着なるといふも事実也

以上後蕃の談話を蒙況したるまゝ あるまゝ其の談話を根拠として書印象を深くなしたるまゝ 私見の加へたるハ言ふまでもなし

後蕃の養方

しなる中ゝ二三種の毒薬あるこゝ秘奥を根拠を取押へたるものを蔵ふ物のことい中ゝ九ゝ三のぬきこゝの蔓もあり名を呼ゝ皇達無らし、支那四人の用ゆるハリ方、鍼具を見るに、一つも鋭ゝ其形ぬけし長さ伯四寸許下部切断し中のウロ ハ蜂蜂を入れ口を閉じ現番するか成と蜂蜂家の名

あり、他の一異織物の件もいと珍しみ入る
この蜻蛉を入れ得るやうなるもの
赤木紫檀其外那須産の沓き彫りのある
もの、上部は亀頭の如き形をなす
らハさいるか故に字形とも見へハ方
とハ氣付かざる也　十月十三日記

○十月十四日姫路に著し教乗国吉を過ぎ湯
所左のごし

一惠童抄　十冊
惠童抄は世に流布するも注釈
本極めて稀れなり、北方黄流年間日

本に於て覆刻する所也

一詩人玉屑　八冊
仿宋重雕　細字本にて自刻版ハ
べし

一老境小文記　一冊
池大雅の狂歌を採し写版たるう
自序と古歌を掲く
老如是ハ老を八人求けり
年ハよの写ハ織ハよのとう
書屋に二句を題ます

古句を
現棚まちまちむくのを活用す
又
異ハ皆佛の左に著書す
年頃三人漫也
北市稀數のこの也
○十月十書庶行まで大阪にてき廿日書北數日間
交際と毎劇を拾ひ、其間自動車を施せる廉
田書屋を訪ひ、多数京都書を捨て古の數
書を得たり
一 佛祖宗派源流要 一冊
慶長九年刊行する所、大友寺重

十二行

千とあり、慶永二十五年美濃国印
の刻本を重刊したるものなること原
本の數倍と冬編も吹このうつ也
巻尾に慶永以後の宗派を追刻
し、所産江月に至る、紙数七十
三枚、北市價二十匁也

一 篆法撮要 附論八法 全一冊
隷法要訣
北書浪華堂手書手校
本也、欄外に茵蔯堂三字を刻
し、篆法撮要の内篆字

と解読ハ篆隷書の自筆なることを
篆ハ何らの隷法書能ハ香体篆隷
書と異なるハ此ハ二十ヶ条篆
を併せたるハ篆隷書とす、二重
此との陶都帰園の輯著也

此書価三十両

一 老農百首 写 桐入 一冊

此写本頗る美麗の装潢にて
表紙にハ芳野の風景を色摺彩
色をも描き名家の序跋を
載せたるもし、筆者乃ち左
の如し

十二行

詠者 権律師宗的
大阪南久太郎町妙勧寺住職
加點 高松三位保實
外題 八木巽処
〃序 雲華上人
〃 岡田半江
畳詠 高松季實
〃 摂真
無心寺門跡宅舟上人
跋 中山美石
題句 高松城兄
畫 峰儀
妙勧寺法嗣

○今次の浪華行大隈侯の追悼會と早大を代表
して臨丈る也一日前伺侯を中尉東京を発して大
坂に赴き、會は天王寺の一心寺に於て開かる、當日生
憎雨天なりしも校友多く来會す、余霊前に一場
の演説を為す、時間三分を限られ、甚だ難きを
覚へたれと、會衆は要を得たりと称せり、偶々先侯の
傳記の刊本を携持参し、之を霊前に
供し、余の演説は先づ及しなり、余の演説の要
旨は時艱英傑を思ふとの題目に就て述べ
しと説き起し、時勢の変遷侯後者と活動者
とを述べ、一新早大の事に及び、唯此間に立つ

て学と隆盛とを起きつゝあるは早大なり、大震災と故
侯の没とは大海嘯を失ひたるも、あらゆる復
興事業は完成しなんとす、回顧すれば侯は設立後
を保証する大海嘯也、而して正さに成らんとす、侯の
心を安ずよ、終りに五年の冥目を閉じ侯の
の大事業を継承し、益々発展せんことを期する迄
を以て侯あべしといふにあり、
此一心寺は大なる寺院にて、追悼供
養を当門とするこは時間と制限あり、余が
三分と限られたる演説を試みるも此故なり、
此寺に有名なる茶室あり、小室と八窓のあり、昔
し徳川家康此茶室に休憩して眼下の風景

大盛況（愛媛）

『若槻に見せて』

秋の野の浮世離れ

秋にゆこう朝鮮展覧會

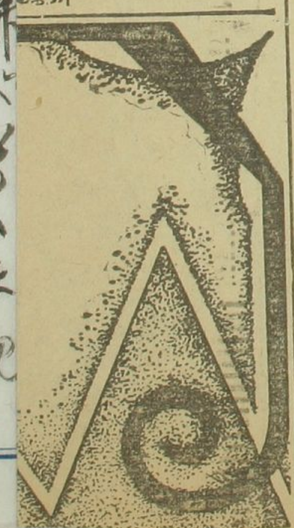
日は、朝來澄みきった秋晴れ。日曜ミ神嘗祭がカチ合つた日曜の休日を利用して朝鮮の『新聞展覧會』は午後四時の開館から午後四時の閉場まで、新潟巻く大盛況。朝はちようど

生きさし生けるもの

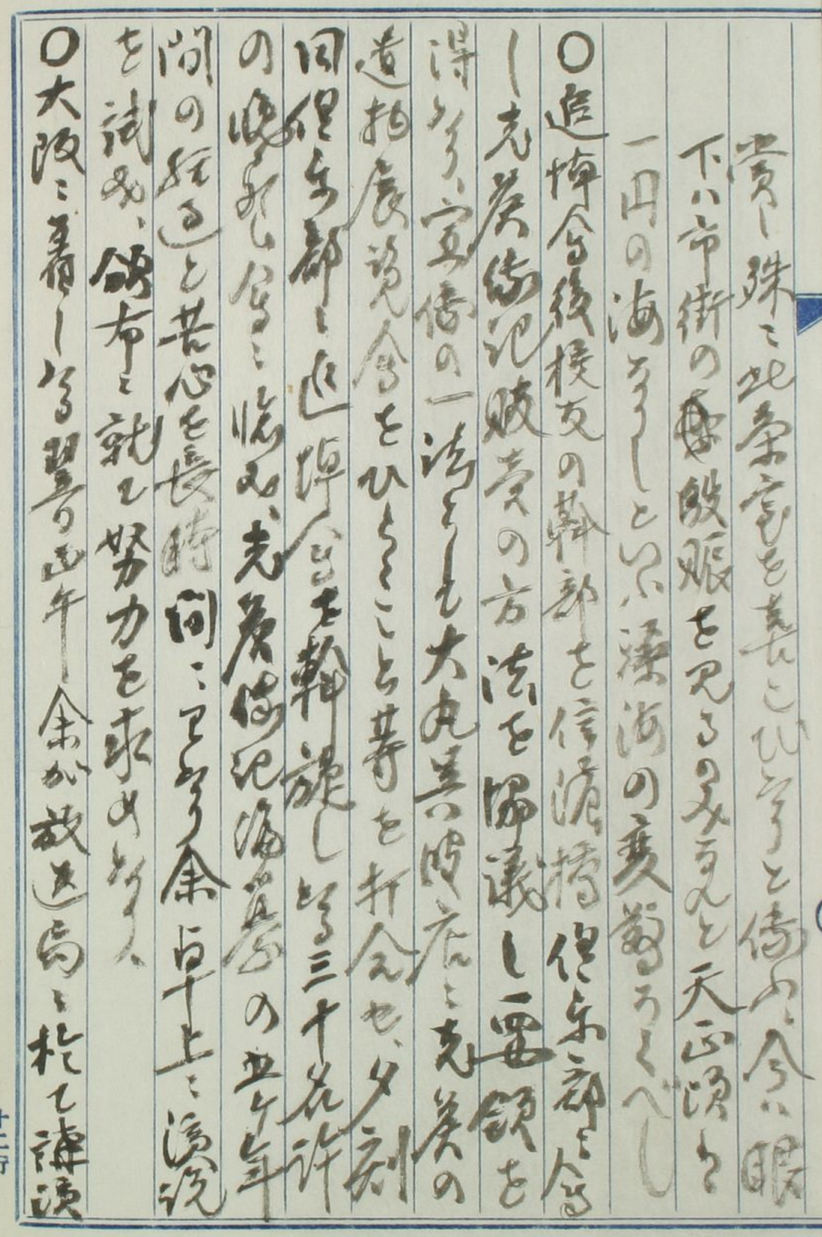
24　山本有三作
田中良畫

「僕は……僕は怒られたいので」

名實共に世界高級の美の魅力を誇る
優秀なるゴムの美
全國デパート販売



高速度の特殊技術　十二人を驚ヘ



貴し殊に此条件を其こひそと倚ふ今小眼
下小市街の毀娘を見るの美なと天正頃と
一円の海をしといふ漢海の変翁ろくべし
○追悼会後校友の幹部を信濃橋倶乗部と合
し元気衛氏歌会の方法を協議し西鶴を
得ようと宣伝の一法をも大丸其他店と元気の
道相談会をひらくことと等を打合せ、夕刻
同倶乗部に追悼会幹部と三十名許
の晩餐会に臨み、元気衛氏の五年
間の経過と苦心を長演説同じくして余は早上と演説
を試み、破布に就て努力を求めたり
○大阪に着しては翌五年余が故郷に向て於て講演

大盛況の新聞展（第五日）

『若槻に一日見せてやりたい』

と、大隈侯が感心　よくも集つた寫眞の前で

日曜こ神嘗祭こがカチ合つた十七日は、朝來澄みきつた秋晴れで朝日會館の『新聞展覽會』は午前八時の開館から午後四時の閉場まで觀衆渦卷く大盛況朝はちようど來阪中の大隈信常侯と市島謙吉氏が日印協會理事副島八十八氏こゝもに來場し、百數十枚の若槻首相の保存寫眞を見て『若槻に一目みせてやりたいな、よろこぶぜ、だがこの上更に若槻好物の盃を手にしてゐるウンこくだけたのがあれば更に面白いが』こ周圍の人たちを笑はせ、市島氏はこの日恰度新聞講演のラヂオ放送をするので良い參考になるこ專門の立場から熟心に見入り、參考品部の新聞發達史の諸出品を非常に喜んで觀覽した、午後は大阪入港中の第五戰隊司令官鳥巢海軍中將が森僚こゝもに來觀『海の上こは變つた世界だ』こ各部出品を殘らず見學した

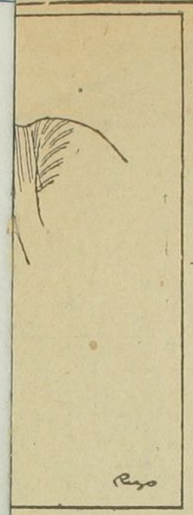
この日の會館新聞は大阪高校關原增雄、大辻鐵藏、三好義雄、甲南高校の小塲瀨卓三、小河內行雄、志田延義、市岡高女の三吉たづゑ、中田保子、大阪女子師範附屬小學校の木下泰介、錦田眞和、赤路福三、堀部浩一、國枝由紀子の十三君で、特にこの日は頁數を通常四頁を八頁に增し何れも潑剌たるニュースやスケッチ、童謠等滿載のものを午後の入場者に配布し好評を博した＝寫眞は「上」觀覽の大隈侯一行（左より大隈侯、副島氏、市島氏）と少女記者「下」鳥巢中將一行

道拓展協會を中心とせる外交刷
同盟を都に近海を輪讃し
の時代と時代の五年
間の經過と共に長時間こゝに
を試み、彼方に就て努力を求めん
○大阪に着し翌日午前余が故郷に向ひ出で講演

十二行

大正十五年十月十八日（月曜日）

猫と人



「どうしたんだ。さつぱりやらないちやないか。」

「いゝえ、やつてゐます。」

「さうか。もつとどんゝやる方がいゝ、これを食ふと元氣が出るよ。」

周作はすつぽんの出場所や、その煮方などについて詳しい說明をしたが、例の問題については一言もいはなかつた。

食事が終るや、彼は大きな伸をしながら

「さうだ、一つ腕力をやらうか。」

「……」

「君は昔はよく兩手でかゝつたものだが、今度はわしの方が兩手でなくつては敵手はないかもしれなさうだ。思ひ切り叱つてもらひたいのです。」

「何だつてそんなことをいふのだ。」

「お父さんは僕の今度の失策を知らないのですか。」

「知らないこともない。」

「それなら何故默つてゐるのです。何故僕を叱りつけないのです。さつき給仕を寄こしたのは、今夜それをいふためではなかつたのですか。」

「いゝや、あれは何でもない。君はひどく沈んでゐるやうだつたから、元氣が出るやうにすつぽんでも御馳走しようと思つたのだ。——そんなに氣にすることはないぢやないか、それ程でもないとに。」

「お父さんはそれ程でもないといひますが、三千圓といふ金は考へ

月ヤク 帶りて奉効なくオ困 の方法として三錢封入私方 最の善方 広告して玉草圓製茶場 ◆山城田邊局内

（元木村病院）
外科 療養 結核性外科 脊椎カリエス 肋骨カリエス 關節結核 結核性痔瘻
レントゲン科
院長 中井玄乘 診察 月金曜 午前中
木村孝藏博士
中井病院 南區塩町心齋橋西 電話三三四六番

流行丸まげ 小田町形
今はやりの丸まげ 江戸さどや
全國有名小間物店に有
大阪南久寶二 小竹形本舗

らい病撲滅藥 新發見

腸疾息
オビ
ルタカ腸性慢性急
響顯效奏に便緣び
フチ腸て以をす

實効は遂に
第一位の整腸消化劑た
る名聲をかちた得り。

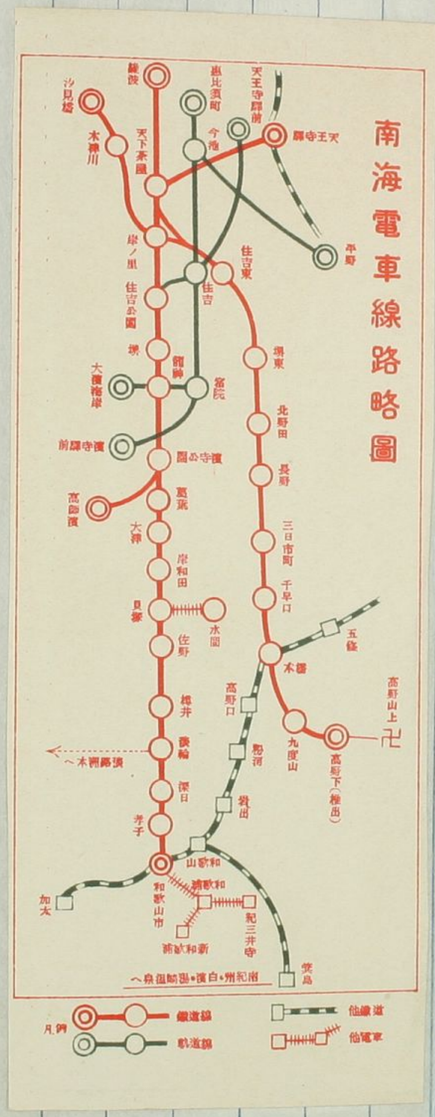
を為すべき事の無いと共に大阪朝日新聞社からも日々の紙上に於て前代未聞の新方法を一流とする事の出來あり自動車を差し遣はすこと等の美とを以て引つき余が故郷の高と接近すべき題ハ新聞紙の普通なる為めに北の関頭ハ偶々そこに自分の連絡あり、自分の一味と共に場所も一出しとなり、流石と相の為の為長い間なるべきことあり、新故の中に柔道九十番の力と少けれど無未滿の利益と以て北征者と賞印すべしといふ北征と今なり序に機械を見る方連度の輪轉機十三台を驅へなるハ北海と

或いは一部九萬枚を刷行し得るが故に十三萬を
百萬枚以上を印刷し得る也
○初日の発売記を聞くに放送局にて列る局の三倍美
服店屋上に仮設されあり其東京のに比すべき極めも
不整とせざるべ、○余の大阪に於て放送を試しるに其の
局に当る校友伊達俊光の代題嘱し難きを因り
霧笛数々取調べる直ちに試演一番時間を
測るの暇あるのみ、或人と出勤日に近うき演
説するも聴者は二百萬のうち、殊に皆は祭
日休日を出掛けるを以て○放送大切の日とし、余に
於て不足はあるも比前四の東京放送に特間
不足の覆轍を踏けんとせり聊か腹稿を略し

十二行

るが故に廿五分間にて終りしなり、
○余が関西二百萬以上の人に対しアドレスしるは大阪毎日新
聞の懸賞論文を宣伝せ、発行が十日に
迫る間百萬と称する読者の目に入りることなり、是れ
宣伝放送に比すれば大なること、余が大阪に着し
る日は第九回の掲げられる高のうち、論題は国民
役の名称と補充の私案と云ふ、これ社の校友
に頼まれて作成したるものなるが
仰定後社方にもの書簡を検すれば毎の社より一百
四の謝金を宅のもとまるなりを見て、原稿出版
をもとせる自分は金を欲せざることを

○十七日（金）の午後石原義三郎氏を訪ね
け住吉に行き甲陽園に遊ぶ。杉安伯外三四の
校書閲覧、北園は六甲山の麓にあり、遊園
地の電車、一日で大阪より約四十分
にて達するを得、旅館別荘新築
列なり殷賑の状を見る。駕家の支店に入る、此家
稽古場）風致あり、唯北園は俗にて、利慶大
阪流の真氣を脱する能はず、一同教案山路を
攀ぢ数丁、全く人家を離れ善福寺の家あり、
入つて見ると二人、紫檀に従ひて来り、橋を高らき
あり崖を攀ぢ橋完をなするなり、橋の長さ七八十間
もあらん、別荘の橋としては大なる（くらの観あり、橋



下を流れ流れて、崖上に見る所、六七十間の下にあり
此渓流に列する自然の岩石あり、岸辺登攀云ひ難し
あり、乃ち流到する所、丹唐の砂地あり、白砂あり
山上に奔放し来る状、点々此に在り、何人の別荘か
るやと問へば大阪創業一店播磨の別荘なり、四年

鳳庵といふ、石原主人を知り、主人の案内にて家に入り
茶菓の饗を受く、家四の話柱に仮りて二階
に上りて見まる風景一偏可言、主人の案内
にて庭園を眺ちく川辺、羊腸の路を攀ち
路の窮まる所に平坦の地あり、一望大阪の市街
を見る、眺望言ふ可からず、山岳の北に聚る風景を
見る、之れを実面に比すれば一段風致の高きあり
し、北庭工事を終らざる大阪湾の一の勝遊地
なり、帰りて家に支度に向ひ夜に入るに
夜帰京の旅宿をなすしかれども出発
を見合はせ、一用物後相談と決し相談
事此に名ある家余如何を説く、六七年前

潤をつけ、人方振此家に欲する情者、此家を
用ふる余状は往年余が●故郷を去りしころ
なりしを用ひおるとのこと
○播州別在行間が国を去り共居に欲すること
なる、主人は石原なる全等の陪席なりも知る市長名
参議皆来る（校友名記載）南北の坂多く来り宴の盛大い
る振る、余大阪の酒楼を皆知るひとり知らざる
は北の楼なり、楼の心家楼の如し入口に如
集年の刻中ある柱形の造あり、大阪の集宿を
こ埋没しなるを掘出し、なるとか、九つぬる方
と後名なるべく道の集としなるものなり一税の風致
あり、家の話播も故郷あり、生家浦風皆可なり、

殊に北家の割烹は大阪の誇りとする所也北家の女
将は年未だ若かく前年校友山本紀士が来[illegible]世
の乗客なりしも熱心運動して成らざることを
思ひ浴べ、北めを相手を乗いろく語る、多の数
育ある手腕の業績実多なり、余と陸り市
長関一氏来、食四後に(き)大隈老侯のるなと
語つて無こ入る、君春お雪の舞踊六四を完
成、今夕大阪の名妓四大抵者ます、其答を
新宿の妓に比するを南北北と新宿者るを
覚へ北夜市長ならず者と談いれ松坂に帰飯す、
事は中川氏と共に也と四坂者の衛生局長なし八
妻秋山氏と府庁にるとそい酌うる云るき

十二行

の親あり、且北夜松坂に別りひ市長代理あ
地位を高めと破格に飯狂態を演す、常吹中
の一快也

○常吹中校友有志に招待され薩蒲洋飯に洋食
の午餐を共にす、北家宿毒搭り時にあり位地
春日の如くしも四時の家庭なれ食を表して全然
洋風とする、余の変化を見て自の感ある
を得す、会食中雲つて塔の高と往年北
家を訪しし時の追懐を述す、其比は家庭
可愛なるに、余等の点めて二階の坐
敷に浪花橋の八行絵屏を見る外、別に高さ
室の装飾も故味ある婚姻を家と迫りも狭

くるまく、そんこの松一本傍外に枝を伸ばし
るがまゝ枯の●に、自分等ハ不快の感をもたし
住まくそんを直通が及ぶ樹を高きうえ来このひお
るを如こ感じて其深を知ればあの樹枝の傍
北松北の高樹充然（其一株の如しとふを笑き、
成る程芝居の書きし割りと見んば此等の共の
ぜくなり、元方のようにハコンナ●無●海のものの
ホ賞するを迷るかと一笑しなることもを
禁る、

○帯汐中住者等と共に和歌山の新和歌浦
を訪ふの機会を得たり、自分ハ二回まで有野山
登りをなさず、和歌山まで足をあゝ入れず、徳

川頼倫侯に和歌山で招ぎ宴あり
辞退し、全く此地を知らざる也、実ハ和歌浦の
風光ハ誠判程なるものと頼倫侯ならず
気乗りもせざりしが山美新和歌浦の様を
説くこと多く、斯る折と来ればハ行くの機会なり
とうとう同盟の新動きとなり東道する日清生
命支社長横田氏ハ流石なるを悟し、朝九時半発
汐の停車場を発し、紀和電車ハ東京まで見
さる食堂附きて心地よく乗り、和歌市と称する
また●一時間半を要し、沿道諸駅ハ前頁と
相同なる地図の如し、十一時半和歌市と下車する
ハ高等女子校事業試験実校友の垂涎なる

多数の出迎ひあり、かりそめの微行の如き事
しハ横田がある校友と電報を発したる結果と知
られぬ、一同自動車を駆り、和歌浦に向ふ
此間僅に十分、車窓ハ海岸に沿ひ巖山を背景
りて作りたる狭隘の道を走る、実に此の勝景の
一般と知られぬ、されハ此巖山の美を尽きり
の面白と知られぬ、間もなく望海楼に着し
す、此辺目覚しき大旅館なく楼上より海湾を馳望
す、前面に山がなく皆温暖の地を育す、紀三井寺の
楼閣の間を走り、直ち和歌山の市の一端を見
ることなく一風変なるを覚ゆ、汽船山岸に多くあり
汽船ハ海ハ多く、上の形の巖石陰に碇泊

の一角に突出す、依て巖石陰の城海の如く似て
見えるも大きくて後あり、屏風の山上にも下瞰の
海景に似て美なるも稍と重也、所謂る媚山の如
此光海の花に此日かさる也、一席に二人を開きて臨時
の校友会をひらく、知事長官の挨拶あり、和歌山
市楠あり、活況往年余大隈侯に代り其の家の酒
を飲ひ世界一統と命じ給ふ余四
く一統ハ一書に書面す、其の誇張と上る余四
に撤しなる也と、本前年大隈侯高山に登り大阪
への海岸和歌山に立寄る時河鹿歌南方
著に紀行の来遊感をかけ給ふ所と上

りなど、余碎中酒の流業を続く、世に井関素一郎
あり六甲地の大造酒家なり、余の世を捨て杯を傾
し始めしと云ふ、酒家の親も先生を厚遇の先
輩也、吾れ南業なんも酒の好酒家なり、先生
こと及のずと余為めに一笑す、話きくに湧き出る
の蒼家と養子の多きを云ふこあり、情常養者
子なるかなと感に一流を立つ養子人杖を一家に得
る所以也、関西の地好人で養子を迎ふるは流石に家
を興す業なるもの若し、故に人杖を求ふる
所以なりと知ぶ養子に実子なる者敬せざる可
ず、あらず徒に及ぶるものあるは行人なりや、過ぐる関西
八他面へある事柄と異なるこあるんと、世中一校

友余の説を聞くして云く、此地の養子を厚遇する
南地の養物養相いつぎ木をもちんば住果をなる
樹のず、養子八即ち之の
書こふ、宮の後一回なるも、清内を馳騁し
草に自動車に乗り、南くく和歌山市街の盛部
を通る、世の大略を知り停車場なるものハ丈
附近に世界一流を模する大書しなる大倉庫を
見る、則ち南方の家なるを知り得なり、住停車
後に着して岩屋まで約三の時間あり、余見る
の人に新し大阪長後紀の長三の時間あり、開敷なる
ことを告げ丈の欲布して努力せんことを依頼
して別る、

北行滞没僅こゝ四日、而こゝ行吉基比多く、就中
人の招きに応じ酒楼に赴くこと頻なるを以上
紹介せらるる外に大隈侯を校友十数と共に鶴家に招き
又大井義雄氏を招く、南北基礎の
業績を談話し楽しみたること多し、
[illegible]に於て一夕と雖も酒を飲
らず、これも亦酒豪[illegible]と謂ふべき歟
大没の校友部に地位を得日の宴に校友多く
豪興をほしいまゝにし少なからず、是れ数日の辛苦を慰
せさる所以也　要略を叙し殘る者くと云
大正十五年十月廿二日記

十二行

大阪に於ける校友左の如し
砂川雄峻
芹谷流三郎
横田流三郎
伊藤孫兵
福島武雄
後藤源治
本間博章

今回校友左の如し
早瀬大吉
生駒嘉左衛
中山達三
柳下寛
大井義雄
於本升

大阪滞在の頃後を追録、大隈侯追悼会のあり、
し在校友有志と公園軍を共にする時余追懐
談を為す、其の侯が幕府政治を没頭し家と
幕境に入らんとして一脚を其の時のことと
今の市時所謂と其の会の会談の
設宴を祝せんとも多数の出の進むべき不悲
報知に来る間もなく及ぶ暫く歩兵数百
校を分ちて三隊とし指揮八方を祝
すること甚だ立ちんとすると余拍手して
ふ所なり校等の先を追上と振る時きき多

十二行

衆平成四年動をなし勧奨を敬ちなり其典会を
今日者老人雑き事を陪べなり
当侯の四倫紀伝寄と五ヶ年没頭しなる事廣を
陳る前に侯の歿後新実を感ずるを軍
ひを除かるも四日侯に謁する日ことを
得たのは是年も侯の八十五年史を三回まも
通達と称つて
おうしかりしは知る廣り侯の侯所
ゝ起つを中年の校書長から凝視し、佐藤
こ語るを聞けば、お有しの方の制会を
用にお歩きなさるといふ故、佐藤八十
年の人と誤る方なるもの

内子と李女の課印二顆石材

楠瀬日年刀

十二行

市鳥氏兆域記

吾亡兒三人墓在五十公野浮念寺附屬山上欲合之而為一兆域而山上餘地無幾也竊以為於今非拓開墓域則後裔不便甚矣因相地于山之左端接鄰境之處地勢高壞頗為好適乃命工鑿地以作幽宮樹石為表境以石垣其地積凡三坪朱

今年春工方設先納骨祀遺骨而為一家
累世之兆域云
大正十五年秋八月　市島一記

○余が五十分の一の兆域に成り墓石の刻のみ未だ成らず前日表面に刻すべき「無量壽佛」の四字を石工に送る、此四字泰山の金剛堅固なり取り綿めて勾勒したるものなり、印人楠瀬日年此を慣る綿字勾勒流麗と称し日年亦墓誌を集字せんとす乃ち嘗て初め智永の千文を誌文字を集む刻書模糊たるを如何せん、不良仮つて裝休の圭峯密の神碑と無く吉祥と有る字十八の多きを及ぶ仮つて各家の一書を取り湊合して字を作らしむ。

余始め湊合の果して成功するやを疑ふ

大坂より伯京の里程日年の勾勒しるすものを見るに全部の高既に稍々且つ高大の功程も終り配字の按排も宜しきを得るを喜しとするなり、筆畫の湊合亦自然にして巧拙を探めし得たりと思ふなり

又更らに一翁を喜しとす、裴休の宮書題る者正高雅の氣象頗る愛すべし、直に勾勒の筆を石工に鄭刻し、初拓精拓大宮玉等を他の拓本と著聞の比を手許に保存す、北の又曲折して表裏を拓しる元亀寿国四大宮の條幅出来取る敢て長宮に掲ぐ堂りしる趣あり、前刻偶に石工にも宮の玉を宮の七来る、此域

十二行

の石柵の成るを報すること、北之事に可、准碑花を置けば完成と別る也

大正五年十月廿二日記

○未知の人吉水林市治竹高義著風を隨者山陽を淡々とうとし略庵の吉水林に泊し此際の一遺事を報し来る

久前藩士鈴木銀蔵と申す人一年小泊陣屋を守る事る日破衣袴の一寒生陣屋に来り酒肴を出す風待中の止宿を頼む故留めつゝ半切二枚を抽筆し謝礼とせし後去る鈴木氏文革もとゝ思いず居りしが後年に成り鴨屋の書性判明し

と暗座の書を初めて拝見することゝなり今
七月書田家に来り又昔の時代の遠北は
吉森なりしが必ず小泊遠なりしと
○北四番間喜兵衛と奉刻であつた、書高社から隨筆
の書物を十二冊出版する計書があり、その題修を
立川留吉と柿瀬惣二郎に頼まれ、差あり取もべきを
目を[illegible]定七郎が来るべき筈が
間に合わぬといふのに、こんな田つた。出雲社で試み
る心つもりなるを、あんたまが多いのに湯
足が出来ず、先づ家を花本を売るとなるとて取戴
を生るものが五十程あるとのこと更に選擇した
其半分を取り、既刊書中収載するものを

五六程選び、殆ど早大図書館に入るべきものを選び
残果二十程を残したが、北内十程位に及第するひあ
らう、三日間の努力で四十程の獲なかしまず探せ
ばいくらもあるべきひとつのけんとう時分の許さいの
で、北の四十程を青森北の心つもりなるべく、有
り餘んこのを差かくんば可なり面目が改まつた報
があるべき差あり、昔まとと二巻を入るべきことを表
選し、殆ど追々原本を拾ひしかるべきことをすんば
れ南の月蕎麦が出来ると、言の自分の壮年の頃
から隨筆を書かぬ人ひとりとなる程も淡人ひとりとなる
かしいと昔物を拾ひとなるとやとなるとも
毛捨て書いたるを得ぬ、何とてもんが著名を隨筆

八或は四とか出版されたり、美をすると傳記することが
おもしろくないの、可成は隨筆の形式に捉まず、埋
没してみることのと出して見たいという趣があるから
必ず珍奇のものという傳記を傳へ、動もすると無味のも
いものを入れることとなるから、美を表へ傳へること
ず、堅くるしいこと大体者が多いとすず、為面白
く各科に及ぶの要もあるのと、隨筆面白を以て
任とするなれば、毎月一の趣味を捉へて明るく因意を
じて、才一巻の絵序を自分の隨筆報を掲げること
とするとしてみるが未だ第低とならず、僅に一端
を表出に過ぎないとの通に、多く行はれるから、校会
掲りを後日得て此冊に収めるとあらう、自分は嘗

つて同書刊行会で毎月の隨筆を刊行したこと
がある、益石十種の績、篇を刊行の出版も其
一端である、今度の業績は剣はられも大きく且つ
明るく隨筆の刊行が活行であるから、努力を
要する、自分としては永い経験上の関係から振つ
たもの出して見たい、

○春風遊筆、新やく組上り頁数は七十七ページ
かの頁迄ると、五万六千
頁まであるとのが、概算の基い杜撰を
今更ながら感じる、原稿の大部分は活字組
人になるとあるから、刻会と出目が多かつたの
ある、五万六十頁とすると本の体裁も矣

七角もとして價を聊か高くつけ始めたのは急に拵へ出したものを三十銭頃除きえん
を後の陶器に回すことにして、自分の主義
自著の價を出来る限り低くこうするとある（十
月三十日記）

○昨日比谷図書館に到り柳亭種彦喜多村
筠庭京伝春信等の著書陳列を一覧し多くの
興を感じ、種彦の遺族高屋猛といふ三十才
計りの人も来たりあり、その人からいろいろのものを出
しもあり、静子氏源氏松三組叮嚀に高屋金こく
といふが他遺品の持主なりとあり、四方の
画一に種彦の遺像一幅が目を惹いた、後者は

似顔らしく、雅世らしい
短冊が貼りつけてあつたことを定
まる秋の柳かな」自書、淡彩三四あり此外皆
小品であつた、おもしろく思つたのは四会源氏の初
種板刷で、半紙四つ折の帳面仮の表紙の初
の細部に彩色をなす者のいとまを、初めて寓目の
あひである、何かの書物に種彦の著出印が捜
してあつた、長方形の輪廓の中に「北斗堂
世本かき種彦」と刻ませて居た、種彦の後は四
つ花菱であることが遺像の素袍に記入した、種
彦は高屋彦四郎の初代と称し高二百俵
と知られたるも、種彦は川柳格

に初めてある句の少なくない、十偏舎を木卯といふ
此、柳営を割つたのである、(高田馬場)が木卯
の柳句を初めて印刷した冊子を北の合巻に
掲げた。
江戸名所図会名の初めて高蘆月岑の名を
の後で天保頃から明治に掛て暖気樓と其名が
出てゐる、高蘆庵は幸成といふが芳年あ
る、月岑の父は芳斎と云ふて浮世絵師であつた。
此人は金石趣味があつたらしく、江戸武蔵の金
石を手掘りに拓本が、其の家から十数部も
出版されてゐた、こんな変り江戸趣味から来
た仕業と見ると、月岑の江戸名所図会を著

すると云ふ此の其間に江戸の名所
陳列中、月岑の開宜園漫墨三十冊が出てゐた
帝国図書館にも自筆本が有る未刊行の
ものがある、木版刷から人面の紙といふ物が出
てゐた、こんな月岑廿四才の頃の著作である、外に名所
図会の稿本が出てゐた

墓所は

竹屋　浅草新谷町田甫　幸龍寺
月岑　浅草北清島町報恩寺中　法善
寺
秋彦　赤坂区　一ツ木町　浄土寺

柳亭種彦 喜多村筠庭 齋藤月岑 追遠紀念祭陳列目錄

甲 柳亭種彦

イ その編著になれる隨筆・雜著

一 還魂紙料 文政九 二冊 日比谷圖書館
二 同 明治年間 二卷 全一冊 同
三 用捨箱 天保一二 三卷 三冊 同
四 柳翁筆記 寫〔前田香雪書入本〕二卷 二冊 同
五 諸先生高尾考集覽 一名高尾年代記 嘉永二 一冊 同
六 同 明治年間 一冊 同
七 淺草海苔ノ記 北齋畫 天保一二 一枚 中田良道氏
淺草田原町中島平左衛門の爲めに編せるもの。淺草海苔の沿革を詳細に記したる廣告文なり。
八 江戸塵拾 種彦補寫 一冊 日比谷圖書館

九 淨瑠璃本目錄 種彦・蜀山〔蜀山人舊藏〕 自筆本 一冊 加賀豐三郎氏
一〇 柳亭家集 自筆本 一冊 川尻清潭氏
自家吟詠集なり。

ロ 種彦著作の合卷・讀本

一一 種彦傑作集 明治二七〔帝國文庫第一六編〕 一冊 日比谷圖書館
一二 種彦短篇傑作集 幸堂得知校 明治三五〔續帝國文庫本〕 一冊 同

○

一三 あらし 北岱畫〔文化五〕 一冊 三村清三郎氏
種彦作の洒落本なり。
一四 同 一冊 日比谷圖書館
一五 近世怪談霜夜星 北齋畫 文化五 五卷 五冊 早稻田大學附屬圖書館
一六 淺間嶽面影草紙 北嵩畫 大正六〔繪入文庫本〕 三卷 一冊 日比谷圖書館
原本は文化六年刊

一七 鱸庖丁青砥切味 北嵩畫 文化八 七卷 二冊 林若吉氏

一八 淺間嶽後編 逢州執着譚 北嵩畫 文化九 五卷 五冊 早稲田大學附屬圖書館

一九 京一番娘羽子板 重信畫 文化九 六卷 一冊 林若吉氏

二〇 勢田橋龍女の本地 北齋畫 文化一〇 三卷 四冊 早稲田大學附屬圖書館

二一 綟手摺昔木偶 重信畫 明治三七〔補珍名著文庫本〕 四卷 一冊 日比谷圖書館

原本は文化一〇年刊

二二 錦帶準無間 重信畫 文化一〇 六卷 一冊 林若吉氏

二三 堀川歌女猿曳 重信畫 文化一一 六卷 一冊 同

二四 非情音介滑稽(カケス)鳥轉 國丸畫 文化一二 二卷 一冊 日比谷圖書館

二五 女模様稲妻染 重信畫 文化一三 六卷 一冊 林若吉氏

二六 忠ト孝義理詰物 重信畫 文化一四 六卷 一冊 同

二七 曾我太夫染 文化一四 一冊 早稲田大學附屬圖書館

二八 千瀬川一代記 國貞、貞繁畫 文政二 六卷 一冊 同

二九 淺間ヶ嶽煙之姿繪 重信畫 文政三 六卷 一冊 林若吉氏

三〇 桔梗辻千種之杉 國貞畫 文政三 五卷 一冊 同

三一 南色梅早咲 重信畫 文政三 六卷 二冊 同

三二 繪操二面鏡 國貞畫 文政三 六卷 二冊 同

三三 新彫翻案道中双六 國貞畫 文政四 六卷 二冊 同

三四 娘狂言三勝ばなし 國貞畫 文政四 六卷 三冊 同

三五 浮世形六枚屏風 豊國畫 文政四 六卷 一冊 同

墺太利ドクトル、フイツツマイエルの譯あり。 一八四〇(天保一一)

三六 同 慶應三 一冊 早稲田大學附屬圖書館

三七 同 〔明治年間〕 一冊 日比谷圖書館

三八 忠孝兩岸一覽 國貞畫 文政五 六卷 一冊 林若吉氏

三九 小脇差夢の蝶鮫 國貞畫 文政六 六卷 一冊 同

四〇 水木舞扇猫骨 國貞畫 文政六 六卷 二冊 同

四一 操競三人女 豐國畫 文政六 六卷 一冊 中田良道氏
四二 燈籠踊秋之花園 國貞畫 文政七 六卷 二冊 林若吉氏
四三 正本製 第七至九編 文政七至九 國貞畫 一冊 日比谷圖書館
初編は文化十二年なり。
四四 雁かね紺屋の早染 國貞畫 文政九 六卷 一冊 林若吉氏
四五 蛙歌春土手節 國貞畫 文政九 六卷 一冊 早稻田大學附屬圖書館
四六 笹色猪口暦手 豐國及二世豐國畫 文政九 六卷 一冊 同
四七 柳糸花組交 國貞畫 文政一〇 六卷 一冊 林若吉氏
四八 忠臣藏翻案 國貞畫 文政一一 一二卷 三冊 同
四九 修紫田舍源氏 國貞畫 文政一二至天保一三 三八編 八帖 日比谷圖書館
五〇 同草稿 夕顔の巻 自筆本 一冊 三村清三郎氏
五一 同草稿 第八編 自筆本 製 大正九 一冊 日比谷圖書館
原本は松廼舍文庫の所藏なりしが過般の震災にて燒失せり。

五二 同 明治三一 〔續帝國文庫本〕 一冊 同
五三 同 明治四三 〔葵文會本〕 〔見本〕 一冊 同
五四 同 明治四三 〔稀珍文庫本〕 〔見本〕 二冊 同
五五 同 大正二 〔日本文藝叢書本〕 〔見本〕 一冊 同
五六 同 大正四 〔有朋堂文庫本〕 二冊 同
五七 同 五版 大正七 〔繪本稗史小說第七集〕 二冊 同
五八 其麥紫の寫繪 豐國(三世)畫 嘉永頃 四四枚 日比谷圖書館
五九 紫式部げむじかるた 國貞(一世)畫 安政四 三一枚 同
六〇 源氏後集餘情 豐國(三世)畫 安政四、五 二七枚 同
六一 御誂染遠山鹿子 國貞畫 文政一三至天保七 六編 二冊 同
六二 昔々歌舞妓物語 國丸畫 天保元 四卷 一冊 林若吉氏
六三 富士裾うかれの蝶鳥 英泉畫 天保二 四卷 一冊 同
六四 花櫻木春夜語 英泉畫 天保三 四卷 一冊 同

六五　坂東秀佳瀬川路考追善　三津瀬川上品仕立　國貞畫〔天保三〕　二卷　一冊　日比谷圖書館

六六　邯鄲諸國物語　國貞畫〔續帝國文庫本〕　明治三三　一冊　同

六七　同　大正八　五冊　同

伊勢卷以後は仙果の作なり。

六八　正本製樂屋續繪　國貞畫　天保五　八卷　二冊　早稲田大學附屬圖書館

六九　關東小六昔舞臺　貞秀畫　天保六　四卷　一冊　林若吉氏

七〇　關東小六後帙　貞秀畫　天保六　四卷　一冊　同

七一　讀宮城野葱昔　國貞畫　天保八　四卷　一冊　同

七二　綠結月下菊　國貞畫　天保一〇　六卷　五冊　早稲田大學附屬圖書館

人情本なり。

八　手簡・遺墨

七三　仙果宛手紙　一通　三村清三郎氏

七四　狂歌　幅　種彦筆　一幅　高野辰之氏

七五　凧の自畫賛　種彦筆　一幅　川尻清潭氏

二　手寫本・書入本

七六　柳亭手抄　寫〔種彦〕　一冊　林若吉氏

村田了阿上人に送りし拔抄片。

七七　洞房語園　庄司勝富　寫〔種彦〕　一冊　日比谷圖書館

七八　今昔操年代記　正本屋九右衛門　享保一二〔種彦書入本〕　二冊　笹川種郎氏

七九　吉原伊勢物語　寛文二〔種彦書入本〕　一冊　同

八〇　八十翁昔かたり　〔種彦書入本〕　一冊　三村清三郎氏

八一　竹堂隨筆　寫〔種彦書入本〕　一冊　帝國圖書館

八二　あつま物かたり　德永種久カ寫〔末三葉種彦書入〕　一冊　日比谷圖書館

八三　高尾考　山東京傳編　文寶亭補〔文寶亭自筆本。種彦の書入あり〕　一冊　同

木　參考資料

八四　柳亭未亡人より舊藏本に就いての遺言狀　人梅彦宛門　一通　林若吉氏

八五　柳樽　四七冊　岡田朝太郎氏

種彦が木卯の號を以て柳樽に序し或ほ作句したるもの。文政より天保に跨る。

八六　戯作書工番附　一枚　中田良道氏

八七　大府朝士錄　寫　一冊　日比谷圖書館

高屋彦四郎知久卽ち種彦の名見ゆ。

ヘ　三世種彦（高畠藍泉）

八八　花街漫錄　文政八〔藍泉書入本〕　一冊　三宅彦次郎氏

八九　兩國橋自畫賛　一幅　川尻清潭氏

乙　喜多村筠庭

イ　その編著になれるもの

九〇　嬉遊笑覽　明治一五〔我自刊我本〕　二冊　日比谷圖書館

九一　同　近藤圭造校　三版　一二卷　一〇

九二　瓦礫雜考　大正五〔文化一四ノ序〕　一八冊　同

九三　筠庭雜錄　自筆本　二冊　同

九四　畫證錄　卷上　寫　一冊　同

九五　過眼錄　寫　一冊　早稲田大學附屬圖書館

九六　時行修容　寫　一冊　日比谷圖書館

ロ　手抄本・手寫本

九七　西域聞見錄　寫〔筠庭〕　一冊　林若吉氏

九八　アメリカ漂流記、呂宋國漂流記、異島漂流記　一冊　同

九九　海島逸誌　寫〔筠庭〕　一冊　同

一〇〇　癸辛雜識　寫〔筠庭〕　一冊　三村清三郎氏

一〇一　飛那堂能塵　寫〔筠庭〕　一冊　帝國圖書館

イ　その編著及手寫本・書入本

一〇二　江戸名所圖會　齋藤長秋編　月岑補　雪旦畫　天保七　〔配り本なり〕　二〇冊　日比谷圖書館

一〇三　同　二〇冊　武笠三氏

一〇四　同　稿本　齋藤莞齋及月岑自筆本　一帖　日比谷圖書館

一〇五　同　畫稿　雪旦畫　自筆本　一冊　林若吉氏

一〇六　武江年表　嘉永三　八卷　四冊　日比谷圖書館

一〇七　同　喜多村筠庭等補　增訂大正元　一冊　同

一〇八　同　卷四至八　〔月岑書入あり〕　五冊　幸田成友氏

一〇九　同　卷九至一二　自筆稿本　二冊　笹川種郎氏

一一〇　巷談　操筆　自筆本　一冊　伊原敏郎氏

武江年表後篇の初稿なるべし嘉永六年より慶應四年までの記事を收む。

一一一　東都歳時記　一名江戸歳事記　雪旦、雪堤畫　天保九　四卷　一冊　日比谷圖書館

一一二　同　〔月岑書入本〕　五冊　幸田成友氏

一一三　聲曲類纂　雪堤畫　弘化四　五卷　六冊　日比谷圖書館

一一四　同　增補　明治二二　六冊　同

一一五　人面草紙　自筆　一冊　林若吉氏

月岑二十四歳の時の戯作。

一一六　翟巢漫筆　自筆本　三〇卷　一五冊　帝國圖書館

一一七　翟巢日記　自筆本　一冊　早稲田大學附屬圖書館

一一八　捜索日記　自筆本　一冊　同

一一九　東都地震記　寫〔武江地動之記と同書〕　一冊　日比谷圖書館

一二〇　浮世繪類考　卷上　月岑補　寫　一冊　三宅彦次郎氏

一二一　武江扁額縮圖　月岑編　寫　一冊　日比谷圖書館

一二二　袋草紙　三冊　林若吉氏

書物の上袋に月岑が集めたるもの。

一二三　東都神佛參詣案内花暦等一枚摺帖　一冊　同

月岑の輯めたるもの。

一二四 風巣見聞誌 鈴木壓外 自筆本 一冊 日比谷圖書館

月岑の自筆序あり。

一二五 江戸圖解集覽 月岑抄 自筆本 一冊 林若吉氏

口手簡

一二六 月岑尺牘 東都歳時記挿畫ニ付長谷川雪旦宛 一通 同

○

一二七 雪旦尺牘 畫工料ニ付須原屋伊八宛 二通 同

八參考資料

一二八 有名無名 第一 明治四五 一冊 池田文痴庵氏

齋藤月岑事畧ー大槪如電の記事あり。

一二九 町鑑 七部 日比谷圖書館

町名主としての月岑を知り得べし。

丁齋藤莞齋（月岑の父）

一三〇 衢之塵 自筆本 一冊 日比谷圖書館

一三一 府中六所宮順路 自筆本 一冊 同

一三二 合考荏戸覽古圖 自筆 一枚 同

一三三 多麻川の部 自筆 一枚 同

一三四 〔莞齋集古雜錄〕 自筆本 一冊 同

一三五 〔江都扁額集〕 自筆 四卷 同

一三六 船橋五日市天道念佛圖 自筆 一枚 同

一三七 船橋天道念佛 自筆 一軸 同

一三八 華林山慈恩寺圖 自筆 一卷 同

一三九 武州葛飾郡葛西東一ノ江醫王山妙音寺安置鬚頭廬尊者像自筆 一枚 同

一四〇 鈴森中古海道圖 莞齋手寫〔享和元〕 一枚 同

一四一 長祿江戸圖 莞齋手寫〔文化一二〕 一枚 同

一四二　承應江戸圖　莞齋手寫　一枚同
一四三　圓福寺古文書　莞齋手寫〔文化一〇〕　一枚同
一四四　木母寺靈寶目〔莞齋及月岑の書入あり〕　一冊　三村清三郎氏
一四五　江戸名所記　淺井了意〔寛文二〕〔莞齋手入本〕　七卷　二冊　日比谷圖書館
一四六　慶長江戸圖　寫〔莞齋の書入あり〕　一枚同
一四七　白木屋井泉銅輪韓人銘　赤井得水〔莞齋の書入あり〕　一卷同

○莞齋自摹揚本

一四八　武州赤塚泉福眞福兩寺鐘之銘　一軸同
一四九　（武州高幡村金剛寺金鼓）　一軸同
一五〇　下總葛飾八幡鐘之銘　一卷同
一五一　淺草金龍寺中　梨のもと茂睡翁墓　一軸同
一五二　多摩郡府中六所宮鐵佛之銘　一軸同
一五三　品河海晏寺什雲盤　一軸同

一五四　武州足立郡梅田村明王院古位牌〔享和三摹〕　一軸同
一五五　東野先生碑〔文化七摹〕　一軸同
一五六　大師河原六字名號之碑〔文化七摹〕　一軸同
一五七　深川海福寺鐘銘〔文化七摹〕　五枚同
一五八　牛島弘福寺鐘銘〔文化七摹〕　二枚同
一五九　白金瑞聖禪寺鑄鐘之銘〔文化九摹〕　一軸同
一六〇　白金妙見宮別當妙圓寺中古碑〔文化九摹〕　一枚同
一六一　志村鎮守熊野權現馬場前石華表臺石之銘〔文化一〇摹〕　一卷同
一六二　西臺村圓福禪寺什古雲盤〔文化一〇摹〕　一軸同
一六三　〔奥澤九品佛攝待大茶釜銘〕〔文化一〇摹〕　二枚同

柳亭種彥　追加

一六四　昔笠博多小女郎　自筆草稿　一冊　池田金太郎氏
一六五　修紫田舍源氏　五編上下　自筆草稿　二冊同

岐路に立つ支那文化の趨勢

一、新北各地に見る支那青年の目標

二、大自然の感化力

三、道教的の色彩

四、儒教的の色彩

五、新旧両文化の共存

六、海の文学の欠如

七、奥底の知られざる支那民族文化

八、東洋文化独特の風韵

九、美術工芸学術の傾向

十、歓楽の前に国家なし

杉原紙はもと播州加西郡杉原村の産也、今越前より産し奉書の稍薄きものにて楮に交へし米の粉の量多し、寸は竪一尺二寸横一尺五寸五分一帖四十八枚拾狀を一束とす、土佐にては藩政の頃は決して民間の雑用にせず、諸大名への手翰、又は奏議用目録、神佛の式等に用ひしと云、かの東錦繪は實に此の杉原なりしが後には地紙と稱する模造紙を用ひたり。近頃の藏書家なりし中川徳基翁は天保四年癸巳三月十一日同心町にて生れし由 文行堂

一六六　邯鄲諸國物語　播磨ノ巻　自筆草稿　二冊　同
一六七　同　大和ノ巻　自筆草稿　二冊　同
一六八　義經一代記　第二綴　鞍馬山　自筆草稿　一冊　同
一六九　清川文七　梅櫻振袖日記　自筆草稿　三冊　同
一七〇　よたれかけ　寛文五　六巻合冊　三冊　同
種彦書入れに曰く、このよたれかけ四の巻までは慶安二年の著なり。五、六の二巻は承應元年若衆かふき法度になりしのち承應二年に書きつぎしなり。序跋に寛文の年號あるは後年に彫り入れしものなるべし。
一七一　興佳帖　〔種彦書入本〕　一冊　同
一七二　火爐自書贊　種彦筆　一幅　同
一七三　吉原自書贊　種彦筆　一幅　同
一七四　種彦肖像及辭世の句　國貞畫　一幅　高屋猛氏
辭世の句は種彦自筆なり。

一七五　田舍源氏版下の一部　種彦・國貞自筆　一冊　同
一七六　諸國物語初稿　大和ノ巻　自筆稿本　一冊　同
一七七　田舍源氏初稿　自筆稿本　六冊　同
一七八　柳亭雜記　自筆本　一冊　同
一七九　田舍源氏系圖　自筆本　一冊　同
一八〇　たかまの文　〔種彦書入本〕　一冊　同
大阪新町の太夫高間の遺書
一八一　薄雲入用　自筆稿本　一冊　同
一八二　口宣受領操戲場之者名題居所明細書　〔種彦書入本〕　一冊　同
一八三　種彦愛用硯蓋　一枚　同

○宮原屋とのふ人（王鐸七絶の幅を持ち来り乞やしむ）こんを篠崎小竹弥義のこゝの也米庵が教しかつて山陽と教し小竹をも慕ひ受けたりと也ひ山陽断いることいまだ宗彰して小竹を彼の師かりとして氏くることを来庵こゝ也し

なるハ北幅なり、小竹が北幅を愛し書たこんび

告ゞ庵を心り素びを流しなり、其詩ハ小竹自

書ゞを北幅ま落るなり外と横境とを人

の後世もあり、こんま撰んが北幅来庵の四字

とあり、初めを知るのるなり実也一見真蹟と

完くなり。支那紫の字こんあり、蓋まの

何者いてゝ中央と割れ抜しあり、是ゝ比

しとゝ云ふとつき山本横浦の印刻を

押ふ、王鐸光ゝ孫ゝ孫ゝ孫小竹

為義の孫ゝ歴ゝ孫とすべし（十一

月一日記）

○六相図ハ東ゝのこゝ何ゝ余が所義に係る自

筆本紙ざめのすさび其ゝ後をあゝいすこあるう

敬明と偽ゝ流れの曲ゝ手馬琴も一目と見

きゝ為ゝゝく、北者を自宅して菊ゝ其者平

大図者絵ゝ為ゝを頃の書見ゝ、但し金部

宮し無きハ其頃ます仕金部出来ゝゝゝし

為めゝゝ其ゝ馬琴の後ゝ何ゝ六相図

ハ支那の製ゝ後ゝを翻後しゝあげ句

和日文を翻案しけるもの二三種世に行はる近江
源物語を宝永十種曲の内にもありけるを
先侍遊物語を柏葉翻案のものを翻案しける
ことなり、然れども物語も亦支那小説の翻案
と記臆す

○隠者叢書を編纂につきいろいろの隠者
を早大図書館に検索せしに全く彼の時代
に持ち入れたる本に五冊もあり三冊ありて見
ハ誰れの蔵書とも知れざりしが北頭に一尺
金洋並の蔵と知れたり、浄蓋よりつぎ出し
昔しといふ二冊の刊本ありて、頗る珍書として價
二百五十円と称するなるが、内容ハ餘り

面白からざるものなり、気に比すれバ西鶴の印の
こと興味あり、此書刊本になるや否未だ知らず
ハ隠者叢書中に加へんとす（十一月
一日記）

○古書に無理解なる内務省の検閲掛ハ往に
滑稽のことをなして嗤笑せしむ
前年の世の中和漢稀論（一九の著）を禁ず
義自由主義の鼓吹と見て出版を禁
じたが、又一方稀書複製会から北頭複製
したる蜻蛉地理記といふ滑稽本の首部を去
手記をひきしやしの種として茶化してある
のを神武を侮辱するものとし三枚刪去を

今しは、実に沼津の誇りとなる、井上抵治郎が
此度の著す三社の神号を掲げて側らに図絵
二度び美がふ新びあるとを守舞汎らも図絵を
も義栗しに後人世を餘蔭為るつかは海
著本まも及人比ハ此つるも紀事後沼
沼の誇りとなる

十一月廿日記

○山田清風氏和紙標本一冊を贈られたる
ハ一昨年土佐の紙業新聞社の山本義俊
といふ人ハ寄らく各地の紙業者を
歴訪して美集しに各種の紙の見本を一
冊に綴つたものゝ現下の製紙ハ略ぼ備つて
みる、各見本ハ紙名、産方、寸尺、締枚数、代価、産

十二行

地が記されてあり、別に抽刷してあつて、製紙の説
華も美く略記してある、製紙業者の参考資料
のものであるけれども、紙の研究に入るに材料となる
ものに、紙の事と就ては聊か吉いて見れることもあ
るが材料の乏しいので満足に出来なかつたが此
の標本ハ自分の新資料を供給するものである

十一月一日記

○随筆書き、編入すべき孫書を過る隣に一冊
送すべきものを得たり、それハ東の花彩見と
いふ劇出に刊本まもあるが明る稀覯のものゝ有
名な俳優の義云の実験談を掲げたるもの
可なり古るいものである、稀覯、後生の刊行

一冊

侯補とし此ことがあるけれども挿絵の無い者は入会
ひとりである

○此の小説界に第一流の著がいくらおれて居るか
るのでいとんな者かと訪ねた所が絵といふ物を嫌
ふて文章流に成て行き入れて出すけ
れども、此金書の流行の事を知らぬ人
なる者の人で又此絵を自家の経歴を
語るものくく、一向理解の無いものであつた
全体此の文章流の自家の経歴を語
るに絵上の物語で、実の語る物語
るの意を者の者は大かあるといふまで、説物
の面白さを味ひであるから文章が高くなること

十二行

信玄の家生活、世と受けること
不思議のるである、自分の此事を信じ第一流の
のるる人であるかを吸ひ起信の像一此が、
ないといふ様な無い絶体に知らるるこの仏、少けば
文章成を出る所全を所の高尚をやつてみる
ものの、いやの明りである、さん事を戻つて思
の後悔を付て亦安政の注合表四年度
出うけて年をいをかうるとこ一度がやつて来
めこを著を凝視てあるこ、此絵こ相
空の紀大の男である、牡士こ
てるると、問もこ等妻あ
男のものとろんを這入つてまま
未て、牡士こい男と

同じく年を経いたるとて夫婦
の事あるいふも、殷勤の美なるを似ず、時平の女と
又受領に、子供丈いかなる意らしかつたに新
る、父母のごとき、缺点も無つたこと、なるこ
とのいかの必ず嘗しく四世全く無関心である一方
であつたに、肉四を好む年人も来ても、夫婦をフォーク
やナイフで肉を切つてやることもせず、ウエイターをして
肉を切らしめて、彼等は必ずしも一般男も出つてきたとい
ふ洽々たる進歩を、一般を驚かせたに併
せて三人が誰れであるかを知らぬ者なく心とあ
めもせず、ならず異てい出ると姫の先くる
のよう彼等は第四宮であることかてあ

十二行

（とうとう殺れ者の張と引合りせて いろ〳〵考くて
又ばかりアンナ人間の著述からも持て来るべきものか
あ感する人い無つた

（十月一日記）

○此の一通り手紙人に同書がいくらかあるが一向
る張つたものが無い、僅かに豊々行庵武元自筆
の十冊詩稿一軸 雲本写行と称する
である、完示校の月江湖集和四冊は国古
版の刻印は殆ひ入れた（墨書）要録四冊も元
禄の初刷本で庄本であるから珍しく物で買入
れた、此の未生ごと千の利休が豊臣と切腹を命せ
られた時の任綱が自筆である、今沼和めて元
めを接入で見た 殺腹生る」といふ言葉を徳川氏

の重なる職員の書物を経歴を知ることである北海道のものは珍々くさのものがこれを見ることもあるが法の中時と出版された新聞十二番としが今は実物と殆ど無いものとなりたが、壮年の頃亀甲のものもあるから慎かに見ては南部二の殖産武士を婚姻を一族鼻を通しかが今又高砂三味のかつら姫を校ものあて一族しかし心意を要見ひある、北海道て出地に当時の職員が小形の手宝古代文字」といふ小冊を高くし来り時ろに、北の古代文字は往年小海道の一つに時と一説を話したことあるかしまは種々の研究を話を未に論定を得ることもある北

十二行

書に記録を編集あり、北海道を刻された土産の附属も多い変遷があつても、色かえに涙といふ用国が異なることもあることを深く興を覚へたのも、第市と存する物と表紙まもつけに一通りの略書歴に新く貴弱ひある十月一日記

○日の新和歌の浦の遊び場に時小便不と入つて見ると、便器の上の日棚が架してあつて、見る全裸の婦人の立像が上げてあつて、小用をするのは恰うも之の節も立つ婦向とそうてみるのひて支那の女性熱家が紀州の婦人立像を作り、その陰部に男根を入れて小便をする婦向とそれこそ同坊異曲であると一笑した

○大阪である酒掛に亂酔や喰詰が出たが、夫を
取れて男女の交接をする示唆が多いと語り出し
十ケ条計りおかしく話して其中の人を笑
ハセたが、皆と興こ入て、淡が終つて先生曰つと
少かセようと云から、咲嗤に思ひつき、女子の不思議
を云へべく謎を云へべきい處女腰ひある、何かこ
れがあるかい医学男ひすると真解を得るのが難
こ就て云へとすべきい北斎曰腰を切解する八外科
醫を待ひず、新部荒くい坊へといふ素人が
医術学械を用ひず切解することをうつて
ると說いたのひ一同い余を喝采を浴ひたれ他の
亦面十ケ条い書つて於くこともあるかこ

十二行

れい北時集出しいことひある

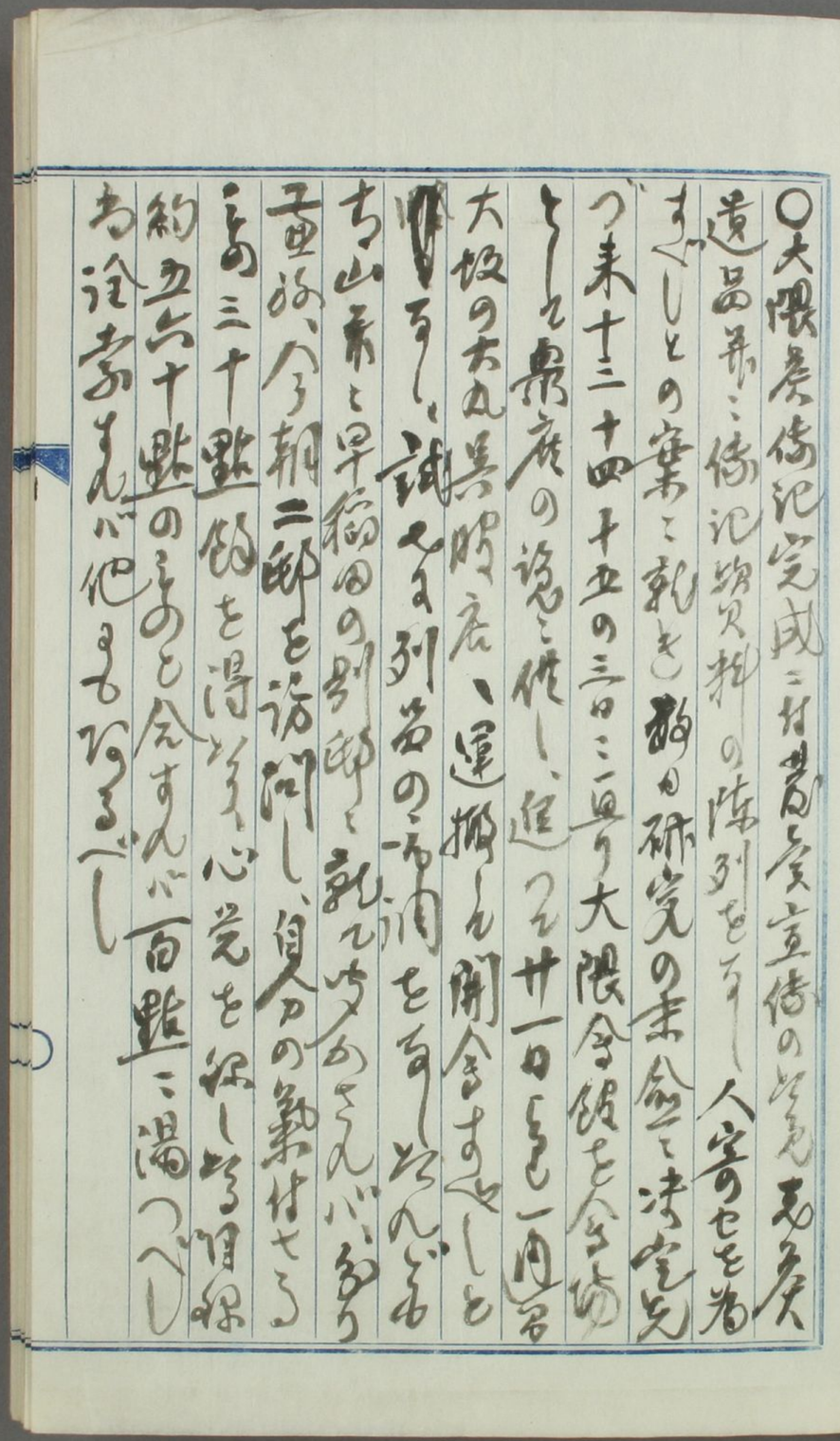
十一月一日録

隨筆文學

市島春城

隨筆は譬ふれば百味簞笥の様なものである。隨筆それ自身が百味簞笥のやうなものだが、隨筆の分布されてゐる所も亦百味簞笥に譬ふることが出來よう。此簞

要せぬ。寧ろ整はぬ處に、一種の文學趣味がある。能文の人が潤色して文を遣り井然順序を立てた隨筆ばかりが概して持て囃されるけれども、無名の人の手に成つて、潤色なしに赤裸々に俗な事を言ひあらはした隨筆、例へば漂流民や市井の商賈などが覺束ない筆を揮つたものに寧ろ隨筆文學の特徴がある。此意味に於て隨筆は日記や手紙と其趣を同ふする所がある。堅くるしい漢文で書いた隨筆よりも邦文で書いたものを採る所以も亦こゝに存するのである。



別邸ニ就テ出陣セシ時ノ左ノ如シ

一 綾子ヨリ自筆の伺書

一 伊達侯初テ洋ものの土産ニ贈ル所ノ洋書額面

一 大久保公ヨリ使節トシテ行カル故ニ

一 御祝ヨリ硯箱

一 御祝ヨリ自筆の詩屏風

一 達子の和歌懐紙帖

一 松平芳之助短冊四枚

一 綾子ヨリ短冊

一 直衣

一 碁盤 天保年間の作ニ成ル

十二行

一 四民漢本 戊辰ロ授授本

一 高野の記 遊雅の時

一 原有為節記 一帖

一 義経

一 御河内考

一 詩

一 人験数

一 都会書数

一 日本綱目

一 夫人洋膳

一 綾子ヨリ人形の小器

一 御柳相子菓子 庭園図帖

尚ほ青田山部より出張をらるべきハ

一 御宸筆 式部

一 明治天皇御製洋服

一 同 御紋付羽織

一 御勝天盃

一 肯像

一 光榮堂壽賀歌帖

一 佩刀

一 束帯服

一 文人の礼服

一 別荘室内

一 臨終寢具の類

一 葬儀の類

一 タゴール賞牌印度絨毯

一 自動車三フォード寄贈 自然の珠

一 除幽侯より寄せる四庫全書

一 ガウン

一 大禮服

一 勲章

一 爆弾破片

右の品は北海道の名産なり

北度殖民会社印刷の絵葉書八枚海産の材料 昆布稲穂等の数を出すべく、ハムハ所載の書籍複製の一部の原版に始めて出すべく

準備中なり、侯の著書八勿論出すべし、尚ほ侯に関する刊行書、侯の演説を速記せしめ官報の速記録の流布初年一侯に関する記事多く紙、大礼の折の新多紙おも出すべし

大隈公爵に侯付の書名八共産主義別用とする（し侯の世界的なる新聞紙上の勿論）雄の後の洋服八大切

侯すべきもの、多数なる人の礼服、之を公の肖像、校の友の献しなる銀米の杯一双、南極探検の紀念ペギン鳥、国旗の製作も出すべし、尚ほ久しく別墨とする侯和像の製作も出すべし、尚ほ久しく別墨とする侯の人の和像を入るる必要の手の者、此探検者と出すも一つなり

十二行

平福田大の者、如何早く宮の賜を受書提出、一

西　夫人も馬琴侯先生の新馬琴と国旗なるを

以て寄贈と見なる夫人の祖父中川　英の自宅本

翻集二冊も出すべし、馬琴八中川氏と米原と俗名

の縁故がある、

大沼、夫人の貴なる遺稿の一部捨あるべし

十二日に陣列を終り　記の新多記者を招

待するきか十二日まで未定

十四日の二時　新国書閲覧室に於

廣関係者を招待し　伝記完成の報

霞をなすべし　行者侯の名を招待

状を出し　侯の接物に次き金を

創立當時の追懷と本校の特長

本大學名譽理事　市島謙吉

本年は早稲田工手學校創立十五週年に相當するので、本月はその記念祝典を催ほし、且つ『稲友會雜誌』の記念號を發行するから、創立頃の追懷談をせよと、編輯主任から求められた。自分は同校が創立後十五週年を經たといふことは、此の依頼に接し、始めて知つた程である。尤も創立當時自分も多少相談に與つたに相違ないが、今日では總て忘却して殆んど何等の記憶もない。唯同校の要覽を披いて見ると、此の學校は明治四十四年三月の創立とある。而して早稲田大學の理工學部は、是より前明治四十二年九月に於て、機械科と電氣科とを創設し、翌年九月には採鑛冶金科と建築科とを開始したのである。即ち同校の創設は理工科創始二年目で、四科揃つた次年度に起つたことが判る。で、一方に於ては理工科の大學が起り、間もなく此の簡易な工業學校が開かれたといふことは、決して偶然でない。

兎に角時勢が理工科の知識を必要とするに促がされて、我が學園も理工科大學を開くに到つた譯である。併し大學は極めて高等の學術を少數者に施すもので、一般に理工科の知識を普及するには、特別にその方法を講じなければならぬ。それには極めて簡易な方法で、廣く多數の者に理工學の知識を普及する、程度稍低い學校を設立せねば、其目的を達し得ない。他の學校に於てはいざ知らず、早稲田大學に於ては、既往の歴史から見ても、一面には高等なる教育を施すと同時に、他面には低い程度の教育を施すを任務とし、現に之を實行して來た。その歴史に鑑み、高級の理工科を開けば之に滿足せず、同時に低級の學科をも設けて一般にその教育を普及し、以て世の中の需要に應じたいといふのが、即ち早稲田の抱負である。

簡易な理工科を開くに到つた趣意はこゝにあるのである。又實際に於て斯樣にすることが、頗る便利である事情が我が學園にある。といふのは折角立派な理工科を開いた以上は機械や教室の諸設備は勿論、教授も多數居られる。而して此の教授なり

偶記倫學の如きを陽外に三上博士の談話を筆録せしもの也　十月四日記

○早稲田工手學校十五周年紀念祝賀の追懷談をこゝに入れて存しおく　十一月吉日

機械なり教室なりは、晝間悉く働いてゐるが、夜間はそれが徒らに手あきになる。

一體斯樣なものを夜間利用せぬのは、極めて不經濟なことで、之を夜間に働かせれば、自ら一學校が、敢て本科の授業を妨げず起し得るのである。此が又本校を夜間に開くことにした一動機で、理工大學が設けられると、間もなく此簡易な學校が設置せられたのである。

創立當時の模樣を考へると、既に夜間の工手學校が、彼方此方に設立せられ、それが頗る便利のものとせられてゐた。工場等に勤務せる職工等が、幾許か理工科の知識を要する時勢となり、理工科の盛大に赴く形勢となり、最早や此の知識がなければ、追々以前の樣に工場に勤まらぬ有樣となりつゝあつた。そこでその時勢の必要から早稲田方面に工手學校を開いても、必ず來り學ぶであらう。卽ち更に一夜學校を增しても、それが贅物になるが如きことは、斷じてあるまいと觀測したが、さてその時第一問題となつたのは、早稲田の地形である。此の夜間に來り學ぶものは、多くは工場に出入する者が、公務の餘暇に來り學ぶとすると、餘り工場に遠からぬ所でなくば不便ならずや、早稲田は極めて教育に適する淸閑な地であるが、稍僻在する。普通の學生には申分ないとしても、工場などに關係あるものに如何と、此が創立當時研究された問題であつた。その時電車は江戸川邊迄通じ、今日の如く早稲田迄開通してゐなかつた。江戸川の終點から早稲田に來るには、多少の時間を要するから、其邊は如何といふ事が、多少問題となつた。尙考慮を要したのは、既に多數の同種學校成立し、それがそれ〴〵特長を有してゐる。新に學校を起すには、既設の學校につき長短を調査し、短を捨てゝ長を採り、相當に特色あるものを設立せざるべからずといふことも大切の問題であつた。卽ち特長として他に誇るべき點は、第一に大學の教授が教育せられること、第二、大學の機械その他の設備が直に利用されること、第三、校舍が廣くして十分に生徒の收容が出來ること、其他數へ來ると特色が多々あるのである。

幸ひ現校長德永博士は、此の簡易程度の學校組織に通ぜられ、その立案は既設の多數學校よりも遙かに實際的で且つ整つたものであつた。此時分は、まだ阪田貞一君、手島精一君等存命中で、此等の人々も此の創立に參與せられ、又中村康之助氏

は、德永博士を助けて特に力を致された。それらの事から意外に此事が急速に運び、開校以來約三年ばかりは、學生の數五六百乃至七八百であつたが、大正元年からは一千を越え、更に大正七年からは二千を拔き、同八年には三千に上り、十二年になると四千を越して今もその數を保つてゐる。實に四千といふ數は、當初に於て豫期せざる大多數である。卽ち最初の考は千人乃至二千位と想像したのが、十五年の間に、四千の數に上つたといふことは蓋し豫期以上といふべく、學校の計畫は、成功したものと言ふを憚からぬ。最初學校を開く時には、本學生の多數は、勞動の餘暇を利用して來るものと思つたが、事實は却つてその方面の者少く、特別に工場關係なく來るものも多くなつた。此は時勢が一變し、最早や理工科に屬する職業が、生活上極めて大切であるといふことを裏書するもので、此簡易な技術は日を逐つて益〻必要を告げてゐる。その爲に入學生は今日の數に止まらず、將來は益〻增加することであらう。斯く四千の大數が來り學ぶといふに於ては、當初の考への如く、空いてゐる教室のみで間に合はないので、最も大切に且つ廣き場所を要する製圖教室の如きは、此の四千の人に狹溢を感じ、特に建設する必要に迫られ、前年三百餘坪の大教室を建設するに到つた。

私は折々同校に招かれてゐるが、嘗つて出席せず、從つて夜間の光景も目に觸れる機がなつたのであるが、兩三年前、大學に用向が出來て、六時頃迄學園に居り、漸く歸宅しようと大隈會館の横道から電車道に出でんとして驚いた。それは學生登校の潮時であつて、彼の狹い道は學生で全くふさがり、到底そこを通り得ないので、止むなく道を他へ轉じたことがある。四千の學生が一時に學校に入込む壯觀は、此時始めて目擊し、そゞろに爽快を感じたのである。想ひ起せば往年、帝國大學に教授となれる我々の同窓が、早稲田大學を評して、どうも私學は亂暴である。如何に教室といつても、之を朝八時から午後の六時迄間斷なく使用して、少しの空無からしむるは、餘りに虐待でないかと、私學を罵倒したことがある。若し此等の人をして、工手學校開設せられて後、從前空いてゐた教室を、更に六時から九時迄も使用するといふことを聞かせたら、彼の人等は何と評するであらうか。官費を以て何事も贅澤に育つた彼の教授たちは、恐らく斯る經營などは心得がなく、大方我が早稲田大學に於ける、經營の遣り方を見たならば、恐らく失心する位であると思はれる。

○「集古」十一月號に萩原又仙の仙台敬言中の話を掲ます

風流かけ合問答

洒落本、しかも京傳の作である仕懸文庫に、嫖客が春雨か何かの日、居續をして見知越の女郎共と自分の偶妓の部屋で煙花柳影、他愛も無く遊び盡した後、其の女郎共が座を退かんとするを、嫖客は、マアよいではないかお主達が去たら此座の花が散らう、と云ふと、女郎共、アンマリ羽目をはづすと叱られんすお二人

でお繁りなんし、と云ふて往く。花が散らに對し、お茂りなんしは　眞に粹な言葉なる哉、一寸した句作も流石京傳ぞと、予は褒心で居つたが、後に同じ洒落本の二三を見ると、それにもお繁りなんしの言葉があれば、大方彼等が常套語でがなあらう。添云、お茂りなんしは睦しく樂んであれとの意味なり。

今日では珍籍稀冊とまでにされる八文字舍本の中に

花、祝儀をくれぬ客を嘲る詞に　春日（かすが）さま

その解意はと質すと、暮れるやうで暮れぬとのこと

女郎新造達の事を蔑如しての詞　宵の明星

その解意はと聞けば、暮ぬうちから星がるとのこと

ナント兩つとも穿つた言葉ではないか、差出た言葉だが今時の者に恁な秀句はおもひ浮ぶこと容易では無からう是等はつまり懸合問答の極めて輕妙なものといはふ、扨て其の問答は隨分滑稽なもので、問ふ者答ふる者の頓智を披攄されたものである、一體予が幼時に寄席落語の中に存して頗る賑やかなものとし、下座で囃し立ると高座に二人相並び、問ひましよ〳〵隱す物では、といふと答ふ者が直に受けて、野郎の年に、小供の食物、（問）音のせぬ物（答）牡丹餅する家、流行らぬ芝居、

（問）足らぬ物　（答）播州皿屋敷、茶屋でなぶられ床でふられた、

（問）勇む物　（答）最負相撲の勝、初荷の馬、

（問）とられぬ物　（答）風呂の中での胸倉、水中の月、

（問）終いの知れぬ物　（答）老て勸めならぬ女郎、武藏野、

（問）心得ぬもの　（答）娘の坐禪、子息の螢狩

（問）氣味好もの　（答）憎まれた人の仕くじり・夕立のあと、
（問）恥かしいもの　（答）嫁入りの夜、曠れの挨拶の片言、
（問）見あかぬもの　（答）月花、金銀、
（問）成らぬもの　（答）名人の眞似、外科醫の倅の下痢やみ

などと問ふ者囃しに連れて次第に烈しく早言葉になれば、答ふる方も響の應ずる如くテキハキ口を突いて出づ、此の間聽衆は珍なるに哄笑し、穿つたに感ず、頗る興がる物である。

大津繪節

大津繪節は其の濫觴といふも大層だが、京畿の間に創作された事は言ふ迄も無い、其の唄ふ節曲を味ふてみると字餘りドヽ一の變つた延びたものだらうと予は思ふ、而して此節曲は古來何地に於ても種々樣々なる替唄が出來、猪口の傾くと共に作者その人までも醉に紛れ後々に殘さんともせず、往きなりに經過し來れど偶ま予は杯盤の間に老妓通子の珠を轉するやうな喉で輕い三弦の水調子に寫餘つた所を唄ひまはされるのを嬉しく面白く聞く事がある而も此唄には非常に穿ち得た文句もあれば滑稽突梯なのもある、殊に當年の風俗土情を覺るによい、故に予は往時來此唄の種類を探り集めんと努めあるが未だ百が一も寄つて居らぬ、

變つた物壽し、今の世に變つた物は、眞の暗夜に月が出る、年の始が霜月で、祝ふ餅搗二度三度、牛の丸ぐし煮賣店、針金繩かす電信機、橋も綠青黑塗で、西洋家作り硝子張り、馬車駈る人力くるまに若手が乘て、しびりて京へ上るもお世話無し、飛ばすが岡蒸汽

右は明治維新の際とて、世人奇異な眼をもて觸るゝ物を看來る、馬鹿馬鹿敷まで稚狀であつた、予等父兄の唄ふ所が今一つ同じ樣な節曲、但し少し時代が進んで居る、

流行物づくし　文明のはやり物は獵虎のシャッポに紬の長羽織、衿掛け時計に紙屑ないかね、僕君我輩新聞紙、首卷は外套に代る、ナンでもすき鍋に、人力の値切たをしに、女の丸髷に、西洋造り、ニヤン的と鯰の隱し喰ひ、芝居は新狂言に、木戸錢無しにて矢鱈に押合ふ演舌會、

此の文中衿掛け時計とは上流は細鎖、屑屋の如きも打鈕にて時計と見せかけた物を用ゆ　ニヤン的は歌妓の事、鯰は鬚ある官吏を指すとは先刻御承知なるべし。

托鉢の僧

予が幼きころ七ッ坊主といふて、夕刻の今なら五時過になると、托鉢して歩く僧侶が、緇衣に茶の袈裟、上に網代笠を戴き、下には白脚半草鞋懸けで、五人六人と列を組み、市中を讀經念佛して巡つたものだ、芝の增上寺からは殊に數多群をなして出た。それ等は夜陰に到らぬ前一同歸山する、今思へば學寮に在て終日戒律勤行の餘り、黃昏の間を運動がてら托鉢に出させ、僧侶の身體を鍛へさす慣はしのやうなものであらう或書を見ると、托鉢には右に錫杖をつき、左に鉢を持、七家を限りに食を乞ふ是比丘の法則、七家を終れば鉢披きといふて直に歸寺するもの、亦其の餘を乞はさぬとか。鉢に七種あり木、鐵、金、銀、銅、瓦、匏の七器なり、鉢中に乞ふた飯を五つに分つ、其一は路行く飢人に、其一は水中の衆生に、其一は陸地の衆生に、其一は七世の父母及び餓鬼衆生に、それ〳〵施してもう一つを自己の食とするのださうな、又釋尊の言葉にも日食の上分を取て曠野鬼神の分とし、或は訶利帝母鬼子母神の食とし、或は靈魂神の料に充つ、普く諸鬼に迄及ぶが故に散飯と號くとある、之か托鉢の說である、然るに曠野に「鉢の子に木綿をうくる法師哉」といふのがある、寒い冬枯の夕、志の主が綿花入物を布施した事に看られ珍らしと思へば序に記す、或は俳諧の事故托鉢僧の冬空を想ひ得て、斯くもあらばとの作前たくみとも心窃に疑れるのである。

の時の義一時も忘れず大隈別邸に遺品展
覧会を出陳すべき諸品の調査を乞し此大体の目
録は前日掲げたが初めて実物を見たものもあるから
ずあつた、六月廿二日のことであつた先侯の孫と
さんは墓盤と華也の木地屋三人の年賀葉
所本因坊秀元の朱書と印があつて、なるほど
木地である、元長屋敷の時代のものと外
つた丈のピンが残つてゐるこゝにさんの菊の御紋章
があるのは真を云へば直衣と無直衣があつた直衣
は二重織りある内掛袴のあるのを出すことゝした。從
たらも別の仕様状に第八とゝもに立派の保
さんとなれば義足も二ダあるものゝ一つを出すこと

十二行

あり場動章も数多くあるが手も取つて見るは初めて
で日本のも菊花章のみをえり他を
外国の内霞西五佛蘭西伊太利オ人目に珍らし
いものゝみを出すことゝした。夫人の洋服も二重ある
してゐる内古るい方を云へることゝした、大久保公が
支那に使した招ち悔り長崎に居つた白砂の赤無を
中に双魚があるも棄と刻字があるも清帝から印
度に勲章として好つたものであることが知れた。的
此事の皇后から別つた短冊まも岩倉右府に充れ
女房書清也が清つたものである、充月の岩倉公の
同の附箋して有る。岡倉復本を添して高橋
の懐紙一帳、侯が伺がつた物者の形(歌)の文集

を川崎の屋敷に召しに一報に出陣することなりしに、爵令
嬢は特に維新の際のことなれば、七分の人に異なるこの七八
歳を思ひ入れ、中に錦小路家が準四位になるとなる
八女子光の婦人なりかく比。所謂元老侍男の婦人
決書は陸奥のと提携取扱ひのと二通ある、錦
小路家と入れ比侯任状は三通まもあるが、喪の形式
は初めて多く知れし比。神部仕大典の時に侯爵が式場に
侍まれし比、貴文の屋敷もあり比、雑女に假名が拙
つてあるなどは滑稽なる。遠雅の時の屋敷の志
も出陣まで侯爵があり、十四年に執事が心つけ書
簡目録も書簡の大義に、遠くも出陣を要する品
を書略かあり比夫人のは品の四段の里塗の長こ

湯を沸かす事自分十七八歳を過ぎ比は祭に帰
つて出すことなり比。夫人の手織に係る祝賀錦
も数枚あり比。
拙者の両書を書くの時間を要し、書簡部
数の元帥を手を書け比時の落筆に及
人比出簡数をいつもや元帥べと二年間
に入れ比まるるるなれば、元を帥心出すること
三四時間を要するつき一番後に渡る
ことしし比、
北白山の房夫人も別邸に居り、北白山も
出陣すべき品目をおろす書を元比、中
お元侯が元服の時、別人比美分の像の

あることを知つた、外る前掲の目六こ海の如き
が荒千あつた　　十月吉記

○家蔵こ木活本の稲川詩草と駿府志略があ
るが、其の木活を使へる位なら多人詮整
をする迄もなそうつたが、近刊の本草乎一る其
の木活を使つた出版後十五年の頃迄
みるの如く初めて此の木活のことが知れたるわ
めるのが此者様の眼感ひある　（十月吉記）

十二行

駿府時代に製作された木活字

採選亭木活

採選亭が萬難を排して駿府文事のために盡されか功績は消滅さるべきでない、採選亭木活字に依つて梓行されたものは稲川詩草、駿府志略・他山近體詩稿などであります。然しそれは漢字で脱字のあつた場合には小紙片にそれ〳〵印刷し貼紙をして訂してあつたものです。志略の奥附には

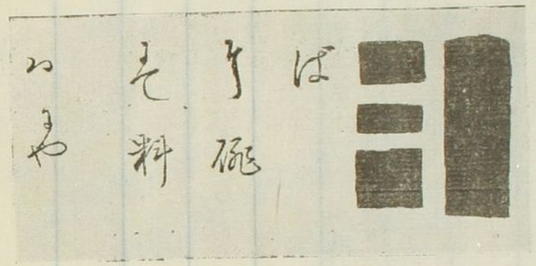
文政十二己丑年仲秋
駿河江川町
久能山御用御書物所　採選亭　綾屋十兵衛

と活字で印刷されてあります。他山詩稿は「文政九年丙戌九月」の梓行でありました。而しこれほどに有名な同家の事蹟の詳細は尋ぬる道がありません。菩提所は傳馬町法傳寺だといふ事ですが、同寺は天保五年十一月六日の大火で呉服町通り江川町傳馬町八幡小路まで燒失し、安政の地震にも燒失して過去帳がないといふ事で墓地には天保十二丑四月十七日天譽直到躬安信士十兵衛嫡子といふ自然石の一基とそのたらびに丸に二引の定紋信譽敎念善士光譽妙念善女横に信光明治二十九年八月三日柴崎佐太郎行年六十四才同人妻ひさと記した新らしい墓石とその隣りに享和二年壬戌歳十月九日柴崎尙賢墓譽聽□了念信士□□□妙喜大姉文化三丙寅歳四月二日卒朝比奈氏女と記した一基があり小徑を經て〻十數基柴崎氏の墓石はあるが十兵衛直古のものは見當らない。くろがねやはおぼぐらしをした家だといふことは今に故老の噂さに殘されてゐるけれどもそれ以上の事は尋ぬるの端緒を得ないのは殘念であります。

十二行

それで偶然にも採選亭の俳諧六帖に用ゐた萬葉木活の殘存されたものが九十一本見付けられました。

その家は何か緣故でもあるかと緣戚の人に尋ねましたけれども老人が物故されたから知れない、隨分久しく物置に入れてあつたもので、箱にしきりをしていさかろとか記しその中にい頭の分をごつちやに入れてあつてその箱には定紋（丸に何でしたか）が記してあつたといふのでした。それ以上はなにもかも不分明です。



木活は寫眞版に掲げた七種で二字一角のものもあり何れもバレン摺にしたもので淺く彫つてあります。駒の大小は三種で、横三分五厘竪三分角と、三分五厘と二分、三分五厘と一分五厘といふ、何れも平たいもので現今の四角型のものではない、駒の高さも九分五厘といふ高さでロール印刷機では印刷が出來ません。寫眞版にはその形を黑く示して置きました。

木活の彫刻師も不分明でした、材は櫻で活字の腹に一々その文字を記してあり、こめ駒などはあつたでせうか、ならべてしめつけるには何を用ゐたものでせうか、大かた楔どめにしたものだらうと思はれます。

この木活の發見されました全部九十一本は笹野堅氏が所藏されて居ります。

（峯山火）

○郵便小兒の戯れと手紙（化の腦）下を書すれば、他に塔へずーと附ます、之れをクスグルと云ひ又こそばゆからすともいふ、支那には之れを耒徑といふよし、昨日漢國の淡子と北條雲峯亭の海

十二行

特別號

（一）（電話番號 第二〇九七號 第二三二六號）（電報略號 第五五五子號）天業民報（日刊）第一千八百廿六號（曜日）大正十五年十一月七日（日曜）（朝鮮所在地 第三種郵便物認可）

日刊

天業民報

第一日曜版

吾輩は徹底的に日本及び世界の歸趨を論明すべく此號に於て純日蓮主義を高唱す

國體主義の信仰

信仰號

（皮相的忠孝觀を去て根本國體の正義に基れ）

十一月號

日蓮によりて日本國の有無はあるべしの一語に日本も世界も最後解決の鍵は存す

新曲 琵琶歌 小松原

鏡と玉の光りより散るむら雲の絶間には夜風にそよぐ濱荻のつきぬ名殘を袈裟掛の

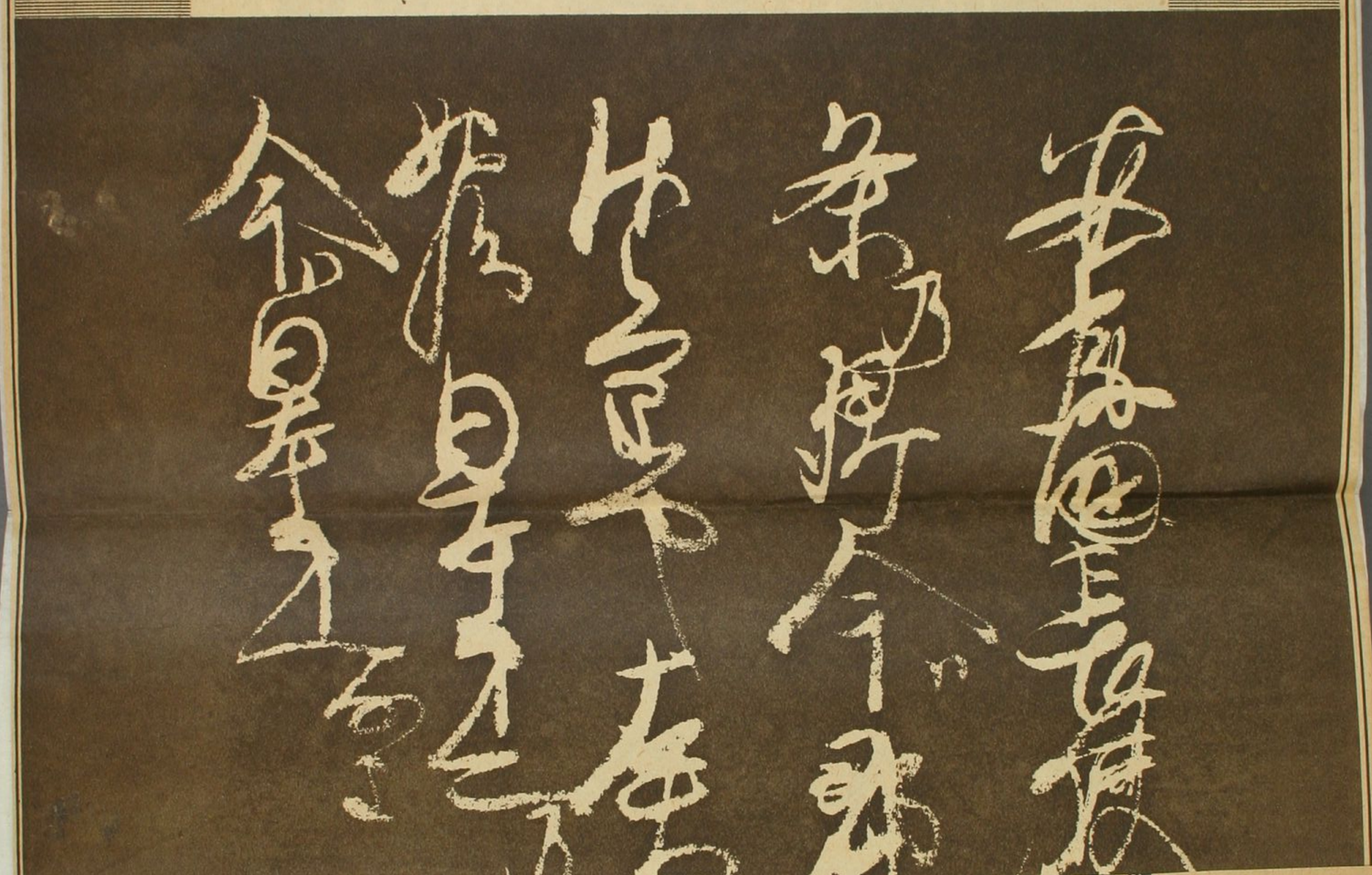
小松原鏡忍寺「菩提の松」（今は無し）

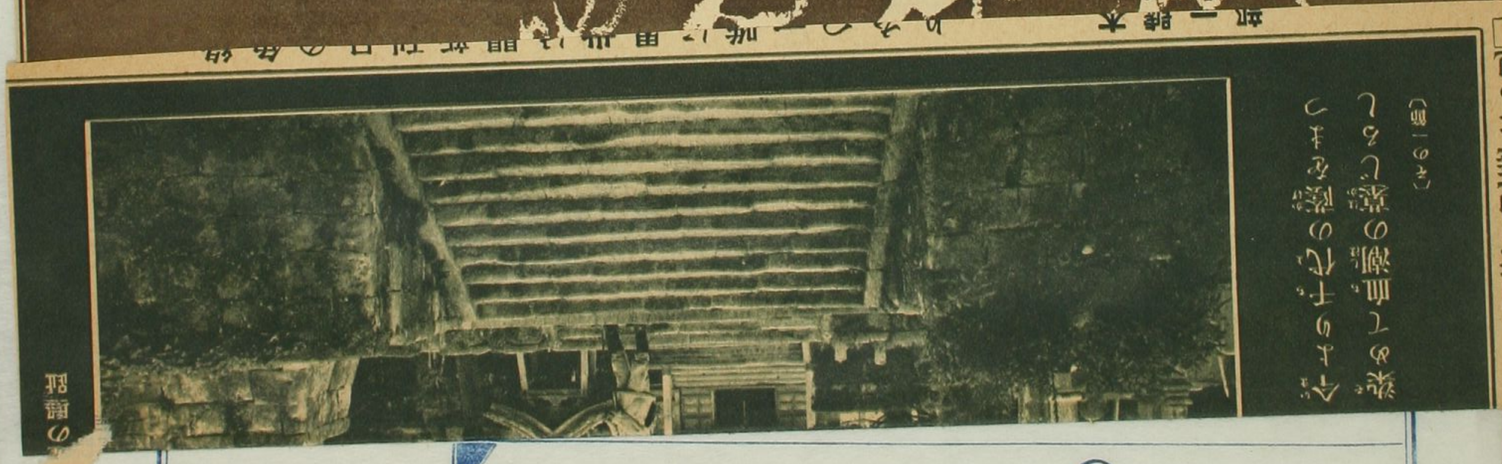
（二）（雜報第三種郵便物認可）大正十五年十一月七日（日曜）　天業民報　（日刊）　第一千八百廿六號

日蓮大聖人御眞蹟

安房ノ國長狹郡之內、東條乃鄕今は郡也、天照太神乃御くりや、右大將家乃立始メ給、日本第二乃みくりや、今は日本第一なり

（聖人御難事鈔の首文）



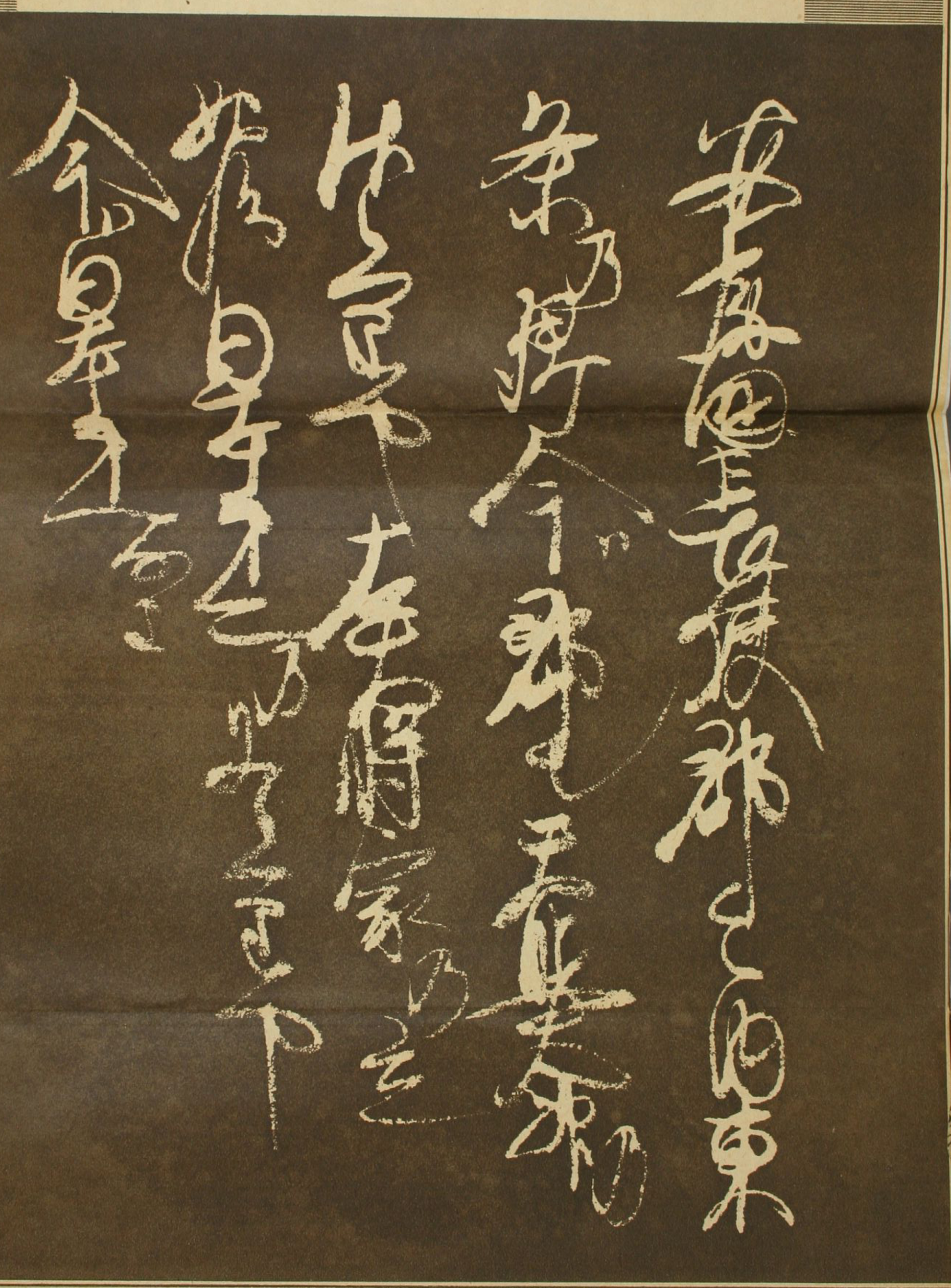


今、よりの千代の榮をまつ
榮あて血潮の驛じゝ
（その一節）

日蓮御大聖人眞蹟

安房ノ國長狹郡之內、東條乃鄉今は郡也、天照太神乃御くりや、右大將家乃立始メ給、日本第二乃みくりや、今は日本第一なり

（聖人御難事鈔の首文）

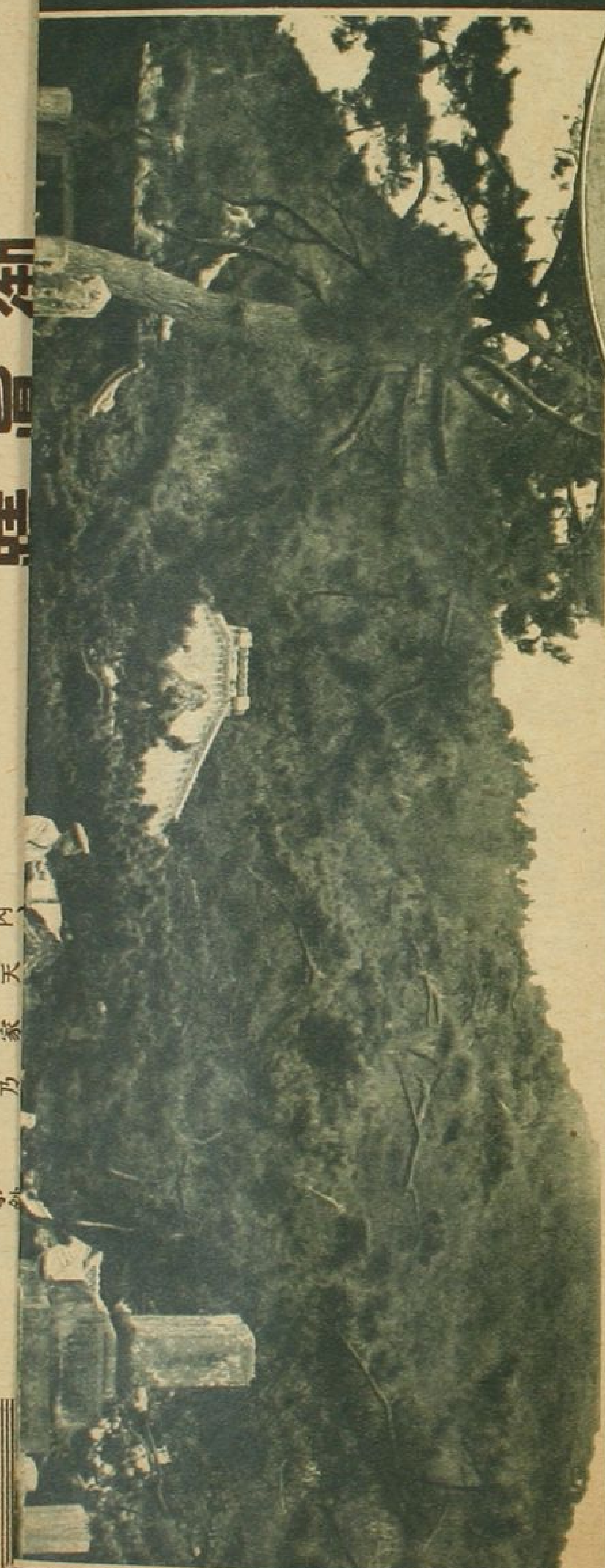


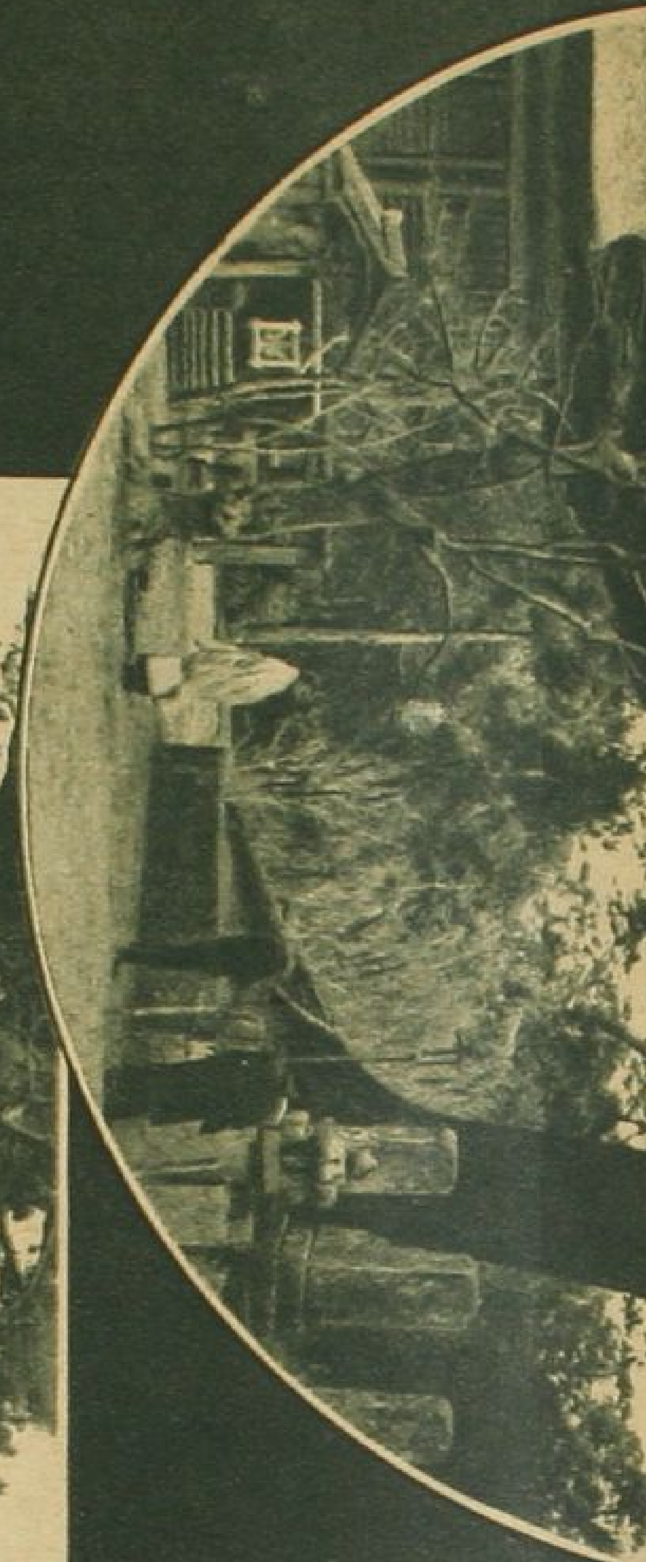
天業民報（日刊）第一千八百廿六號　大正十五年十一月七日（日曜）（二）

日蓮大聖人御遺蹟

安房ノ國長狭郡之内東條ノ郷今は郡也。天照太神ノ御くりや、右大將家ノ立始メ給、日本第二ノ御くりや、今は日本第一なり（聖人御遺文）

菩提の松や小松原
法の操の深みどり





中智學作歌
智定作曲

流れ行く夜長川
の影冴えて
にく〱いざ去は
たみと契りたる

天津日蓮寺、工藤吉隆

天業民報社

大隈侯を招待宴

昨二十日午後五時頃神戸港内第三つた早大校友會大阪支部主催の大隈常信侯追悼會に臨席のため下阪した信常侯には大阪の情調が殊の外お氣に召し、心寛橋はり半に於ける石原善三郎氏の請宴に『酒も甘ければ、此の家の庖丁振も氣に入つた』と御請伴の中川知事や、關市長、さては稲畑商業會議所會頭等と歡談を重ねての歡談笑語、盃を取りもちの美妓は北の『松糸』と南の『大和屋』から、一奴の『越後鶴子』など一入の興を添へた。（中央大隈信常侯、左右中川知事、關市長等）

十二行